

青森市埋蔵文化財調査報告書 第124集

国史跡高屋敷館遺跡

環境整備報告書Ⅲ

平成30年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第124集

国史跡高屋敷館遺跡

環境整備報告書Ⅲ

平成30年度

青森市教育委員会



11世紀の史跡高屋敷館遺跡推定復元図(故高島成侑氏画)



史跡高屋敷館遺跡整備状況1(S→)



史跡高屋敷館遺跡整備状況2(S→)



史跡高屋敷館遺跡内郭から山元 (1) 遺跡内区画施設を望む(NE→)

例 言

1. 本書は、国の補助金交付を受けて平成 18～30 年度に実施した史跡高屋敷館遺跡環境整備事業の成果を収録したものである。
2. 事業の実施にあたっては、文化庁文化財部記念物課及び青森県教育庁文化財保護課の指導・助言を受けた。
3. 本書刊行以前の事業内容及び基本構想・基本計画については、以下にまとめられている。
浪岡町教育委員会 2001『平成 12 年度浪岡町文化財紀要 I』
浪岡町教育委員会 2005『平成 16 年度浪岡町文化財紀要 V』
青森市教育委員会 2008『国指定史跡高屋敷遺跡 環境整備基本構想・基本計画』
青森市教育委員会浪岡教育事務所 2006『国史跡高屋敷館遺跡 環境整備報告書 II』
4. 本書の作成及び編集は、青森市教育委員会が行い、木村淳一が担当した。なお、第三章第 2 節については、設楽政健が執筆した。また、第三章第 3 節は、次の方々から玉稿を賜った（敬称略）。箱崎真隆（国立歴史民俗博物館）・木村勝彦（福島大学）・佐野雅規（早稲田大学）・對馬あかね（名古屋大学）・李貞（総合地球環境学研究所）・中塚武（総合地球環境学研究所・名古屋大学）
5. 挿図の縮尺は、各図にスケールを付した。なお、写真図版の縮尺は、統一を図っていない。
6. 図版番号及び表番号並びに写真番号は、「第〇図」、「第〇表」、「写真〇」とし、順番に通し番号を付した。なお、第三章第 3 節については、執筆者の表記に従った。
7. 出土遺物及び原図・データ等については、一括して青森市教育委員会が保管している。

例言
目次

第1章 事業実施の概要	1
第1節 史跡高屋敷館遺跡の概要	1
1. 位置とアクセス	1
2. 指定状況	1
第2節 事業の実施体制・概要	1
1. 事務局体制	1
2. 事業概要	3
第3節 年度別整備工事等費用	4
第II章 史跡整備の設計・施工内容	7
第1節 本報告以前の施工内容	7
1. 平成16年度	7
2. 平成17年度	7
第2節 平成18～30年度の史跡整備設計・施工内容	7
1. 平成18年度	7
2. 平成19年度	11
3. 平成20年度	15
4. 平成21年度	18
5. 平成22年度	22
6. 平成23年度	23
7. 平成24年度	25
8. 平成25年度	29
9. 平成26年度	31
10. 平成27年度	35
11. 平成28年度	39
12. 平成29年度	43
13. 平成30年度	50
第III章 資料編	63
第1節 高屋敷館遺跡出土土器	65
第2節 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物について	73
第3節 酸素同位体比年輪年代法による高屋敷館遺跡東壕橋脚の年代検証	77
報告書抄録、引用・参考文献	81
既刊埋蔵文化財関係報告書一覧	

第1章 事業実施の概要

第1節 史跡高屋敷館遺跡の概要

1. 位置とアクセス

国史跡高屋敷館遺跡は、青森市浪岡地区に所在している。浪岡地区は、平成17年4月に旧青森市と新設合併した旧津軽郡浪岡町の行政区域内に相当する。

市町村合併により一つの市となったものの、①奥羽山脈から延びる大釈迦丘陵・梵珠山系を境に分水嶺が異なること、②鎌倉時代以降郡制が布かれた時点で、旧浪岡町（浪岡地区）は津軽山辺郡に含められたが、旧青森市は外浜の領域であったことなど、二つの地区は、地理的にも歴史的にも大きく異なる背景がある。

遺跡は、梵珠山系に連なる前田目台地の標高40～44mに位置し、台地の一段下の東側には岩木川水系の大釈迦川が南流している。

国史跡指定のきっかけになった国道7号浪岡バイパス建設事業における発掘調査の成果により、遺跡の保存とバイパスの迂回が決定しており、史跡は迂回した国道7号浪岡バイパスの隣接地に所在している。

JR青森駅から約21.5km（車で約30分）、新青森駅から約17.5km（車で約22分）で、史跡に最も近いJR奥羽本線大釈迦駅からは約2.4km（車で約3分）の距離である。

2. 指定状況

名称：史跡高屋敷館遺跡

所在地：青森県津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻
（現：青森県青森市浪岡大字高屋敷字野尻）

12番/5のうち実測4,082平方メートル、21番のうち実測14平方メートル、23番/1、23番/2、23番/6、29番/1のうち実測303平方メートル、37番/1のうち実測1,347平方メートル、38番/1、38番/2、40番/1、40番/2、40番/7、41番/1のうち実測603平方メートル、41番/5のうち実測783平方メートル、41番/6のうち実測1,281平方メートル、41番/16のうち実測633平方メートル 右[※]の地域に介在する道路敷及び水路敷を含む。

指定年月日：平成13年1月29日

官報号外第15号 文部科学省告示第18号

種別：史跡

面積：29,762.72㎡

指定理由：津軽中部に所在する大規模な濠と土塁を巡らした平安後期の環濠集落跡。濠と土塁を巡らす遺跡は、一般に弥生時代や中世に見られるが、古代のものは、近年、律令国家の直接支配が及ばない東北地方北部と北海道南部のみに分布することが明らかになった。本遺跡は、同種の遺跡を代表し、この地域の社会情勢を具体的に示すものとして重要である。



第1回 史跡高屋敷館遺跡位置図

第2節 事業の実施体制・概要

1. 事務局体制

平成18年度

教育長	角田 詮二郎
教育部長	古山 善猛
教育次長	相馬 政美
幹事・連携調整係	遠藤 正夫
主 幹	多田 弘仁
主 査	工藤 幸子
文化財主事	木村 淳一
"	小野 貴之
"	児玉 大成
"	設楽 政健
主 事	當麻 良人
"	越谷 美由紀
"	田中 浩司
"	竹ヶ原 亜希（担当）

平成19年度

教育長 角田 詮二郎

教育部長	古山 善猛	〃	見玉 大成
教育次長	相馬 政美	〃	設楽 政健
幹事・文化財課長	遠藤 正夫	主 事	吹田 夕貴
主 幹	藤村 和人	〃	對馬 広将 (担当)
主 査	工藤 幸子	平成 23 年度	
文化財主査	木村 淳一	教育 長	月永 良彦
文化財主事	小野 貴之	教育部長	小野寺 晃
〃	見玉 大成	教育次長	金澤 保
〃	設楽 政健	文化財課長	吉田 亘
主 事	吹田 夕貴	主 幹	木村 浩一 (担当)
〃	竹ヶ原 亜希 (担当)	〃	川村 範規
平成 20 年度		主 査	齊藤 寛和
教育 長	角田 詮二郎	文化財主査	木村 淳一
教育部長	古山 善猛	〃	小野 貴之
教育次長	今村 貴宏	〃	見玉 大成
幹事・文化財課長	遠藤 正夫	〃	設楽 政健
主 幹	藤村 和人	主 事	吹田 夕貴
主 査	工藤 幸子	〃	中村 健祐
〃	工藤 雅仁	〃	三上 貴子
文化財主査	木村 淳一	平成 24 年度	
〃	小野 貴之	教育 長	月永 良彦
文化財主事	見玉 大成	教育部長	小野寺 晃
〃	設楽 政健	理 事	工藤 壽彦
主 事	越谷 美由紀	教育次長	金澤 保
〃	竹ヶ原 亜希 (担当)	文化財課長	吉田 亘
平成 21 年度		主 幹	木村 浩一 (担当)
教育 長	月永 良彦	〃	川村 範規
教育部長	小林 順一	主 査	齊藤 寛和
教育次長	今村 貴宏	文化財主査	木村 淳一
文化財課長	遠藤 正夫	〃	小野 貴之
主 幹	上野 富士子	〃	見玉 大成
主 査	工藤 幸子	〃	設楽 政健
〃	工藤 雅仁	主 事	中村 健祐
文化財主査	木村 淳一	〃	三上 貴子
〃	小野 貴之	平成 25 年度	
〃	見玉 大成	教育 長	月永 良彦
文化財主事	設楽 政健	教育部長	福井 正樹
主 事	高石 知世	理 事	工藤 壽彦
〃	吹田 夕貴	文化財課長	成田 聖明
〃	對馬 広将 (担当)	文化財課長	(～昭6.2.7) 吉田 亘
平成 22 年度		主 幹	木村 浩一 (担当)
教育 長	月永 良彦	〃	川村 範規
教育部長	小林 順一	文化財主査	木村 淳一
理事兼教育次長	小野寺 晃	〃	小野 貴之
文化財課長	遠藤 正夫	〃	見玉 大成
主 幹	上野 富士子	〃	設楽 政健 (担当)
主 査	高石 知世	主 事	中村 健祐
文化財主査	木村 淳一	〃	三上 貴子
〃	小野 貴之		

平成26年度		理事	工藤 裕司	
教育長	月永 良彦	文化財課長	渡邊 薫	
教育部長	福井 正樹	主 幹	工藤 一天	
理 事	成田 聖明	"	児玉 大成	
文化財課長	白取 慎也	主 査	田中 美奈子	
副 参 事	木村 浩一 (担当)	"	工藤 洋樹	
主 幹	堰野端 活昭	"	辻村 泰成	
主 査	齊藤 寛和	"	里村 真吾	
"	澤谷 結美子	文化財主査	木村 淳一 (担当)	
文化財主査	木村 淳一 (担当)	"	小野 貴之	
"	小野 貴之	"	設楽 政健	
"	児玉 大成	主 事	須田 祐未子	
"	設楽 政健			
主 事	雪田 幸誠	平成30年度	教育長	成田 一二三
"	笹田 貴子	教育部長	工藤 裕司	
平成27年度		理 事	佐々木 淳	
教育長	月永 良彦	参事兼文化財課長	葛西 俊一	
教育部長	成田 聖明	主 幹	工藤 一天	
理 事	横山 克広	"	児玉 大成	
文化財課長	白取 慎也	主 査	田中 美奈子	
主 幹	伊丸岡 裕之	"	工藤 洋樹	
"	児玉 大成	"	辻村 泰成	
主 査	齊藤 寛和	"	里村 真吾	
"	澤谷 結美子	文化財主査	木村 淳一 (担当)	
"	辻村 泰成	"	小野 貴之	
文化財主査	木村 淳一 (担当)	"	設楽 政健	
"	小野 貴之	主 事	工藤 耕治	
"	設楽 政健			
主 事	雪田 幸誠			
"	里村 真吾			
平成28年度				
教育長職務執行者	(～H28.6.2) 佐藤 克則			
教育長	成田 一二三			
教育部長	石澤 幸造			
理 事	横山 克広			
文化財課長	渡邊 薫			
主 幹	藤 一天			
"	児玉 大成			
主 査	工藤 洋樹			
"	澤谷 結美子			
"	辻村 泰成			
"	里村 真吾			
文化財主査	木村 淳一 (担当)			
"	小野 貴之			
"	設楽 政健			
主 事	須田 祐未子			
平成29年度				
教育長	成田 一二三			
教育部長	横山 克広			

2. 事業概要

本事業は、高屋敷館遺跡が平成13年1月29日に国の史跡に指定されたことを受け、旧浪岡町が平成13年度及び平成15年度に史跡指定地の公有化を実施し、その後、平成17年度に合併した青森市が史跡の保護に向けた盛土工事を中心に進めてきた。

平成19年度には、整備基本構想及び基本計画を策定し、平成20年1月21日に『国指定史跡高屋敷館遺跡 環境整備基本構想・基本計画』としてまとめている（青森市教育委員会2008）。基本理念として、国史跡高屋敷館遺跡の次世代への継承のため適正な保存を図り、多くの人に親しまれるような活用を目指す前提で整備を進めることとしている。また、基本計画では、①復元的整備区域、②保存・修景区域、③学習施設等設置区域のゾーニングを前提に保存・保護事業、遺構復元整備、活用・ガイダンス施設等についても触れている。

平成24年度からは遺構の表示に関する工事等を進め、土塁・壕・柵・門などの一部の遺構については、立体表示とし、堅穴建物跡については、整備対象とした11世紀前半の建物12棟について平面表示

とした。また、史跡の南側に国土交通省が史跡見学者も利用できる簡易パーキングを整備することとなり、平成30・31年度の2カ年で進めることとなった。その他、ガイダンス施設については、既に供用されている青森市中世の館の展示室の一部を市の単独経費で改修し、青森県埋蔵文化財調査センターから譲与された発掘調査の出土品の展示なども含め、平成31年度から供用することとしている。

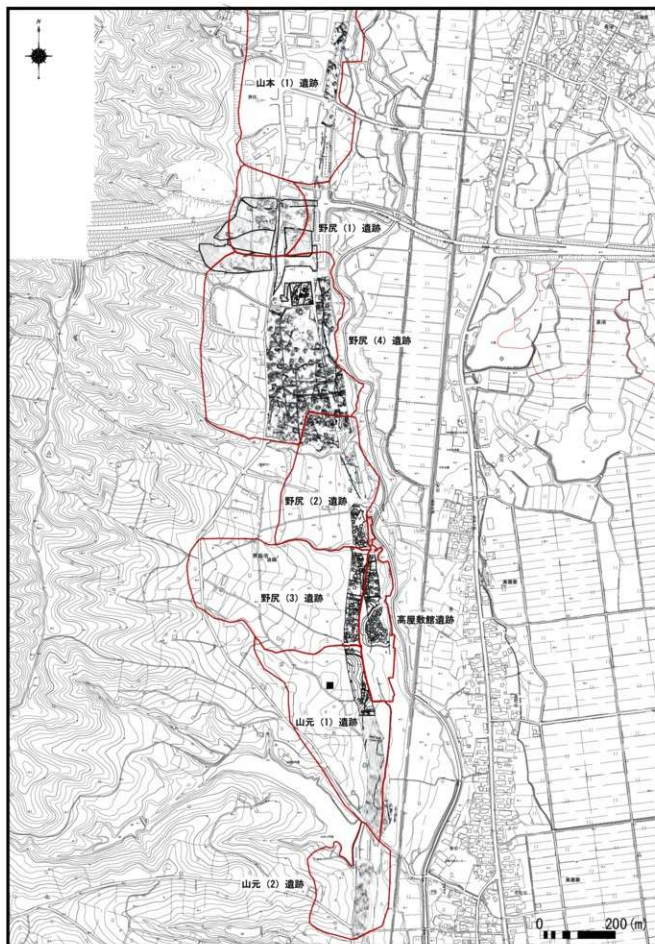
年度別の事業実績については、第1表を参照されたい。

第3節 年度別整備工事等費用

平成18年度		
環境整備工事(有)	清工業	4,866,750円
平成19年度		
環境整備工事(有)	水木土建	5,461,450円
平成20年度		
環境整備工事(有)	石村興産	7,196,700円
平成21年度		
環境整備工事(有)	開成工業	5,575,500円
環境整備工事(有)	開成工業	2,195,550円
平成22年度		
環境整備工事(有)	小笠原重機建設	6,995,100円
平成23年度		
実施設計	ハートエンジニアオフィス(有)	1,575,000円
環境整備工事(有)	開成工業	3,465,000円
平成24年度		
環境整備工事(有)	開成工業	4,389,000円
平成25年度		
環境整備工事(有)	開成工業	3,579,800円
平成26年度		
実施設計	(有) ウッドサークル	1,630,800円
環境整備工事(有)	水木土建	4,082,400円
平成27年度		
環境整備工事(有)	開成工業	5,130,000円
平成28年度		
設計調整	(有) ウッドサークル	842,400円
環境整備工事(有)	鎌田組	4,785,480円
平成29年度		
工事監理	(有) ウッドサークル	1,566,000円
環境整備工事(株)	アオケン	17,111,520円
平成30年度		
工事監理	(有) ウッドサークル	2,116,800円
環境整備工事(株)	市川土建	45,908,640円

年 度	13	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
(公的施設) 内 容	公有化学事業 業	公有化学事業 業	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査 埋め戻し	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	(注1) 建設費 調査 (注2) 建設費 調査 (注3) 建設費 調査	
(m)	8,245,74	20,888,12						648,86										28,702,72
(m)			358	900	550	1,630	1,677	3,589	3,768	1,777								14,249
(m)											1,559	1,881	490	1,542	961	2,640	7,580	16,653
(m)			70	1,270														1,340
事業費	66,947	165,781	5,000	11,132	5,412	8,210	7,270	7,818	7,020	8,452	4,406	5,981	6,670	5,178	5,622	18,692	49,150	386,741
国庫支出金	53,330	122,657	2,500	5,400	2,500	4,105	3,635	3,969	3,510	4,226	2,203	2,990	3,335	2,589	2,811	9,346	24,575	253,621
国庫支出金	6,666	15,332	400	400	400	320	320	375	224	135								24,572
経費																7,000	22,100	29,100
一般財源	6,951	25,792	2,100	5,332	2,512	3,785	3,315	3,534	3,286	4,091	2,203	2,991	3,335	2,589	2,811	2,346	2,475	79,448

第1表 史跡高屋輪船遺跡年別事業実績表



第2図 高屋敷館遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅱ章 史跡整備の設計・施工内容

第1節 本報告以前の施工内容

1. 平成16年度

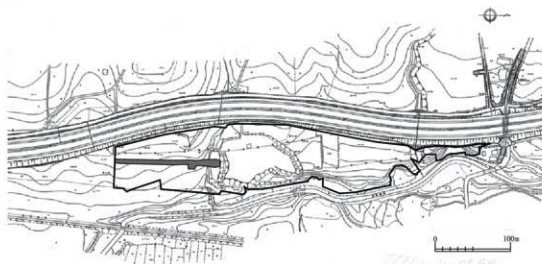
青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した部分の保護盛土が極めて薄く、凍上や雑草木の根による二次的遺構破壊が懸念されたため、堅穴建物跡を中心とした358㎡を対象に、人力で埋戻しを実施した。

※浪岡町教育委員会2005『平成16年度浪岡町文化財紀要V』所収

2. 平成17年度

史跡南側の史跡境界の地点から主要部（内郭）に向けて上幅5m、延長142mの作業用通路（900㎡）を造成した。

※青森市教育委員会浪岡教育事務所2006『国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』所収



第3図 平成17年度工事対象範囲図

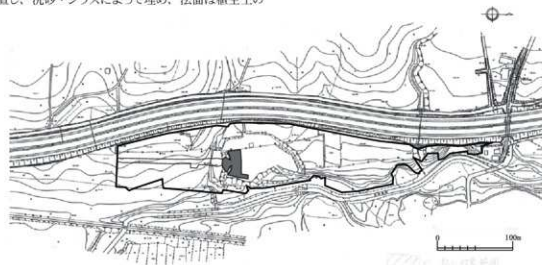
第2節 平成18～30年度の史跡整備設計・施工内容

1. 平成18年度

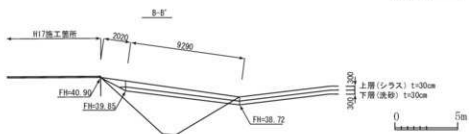
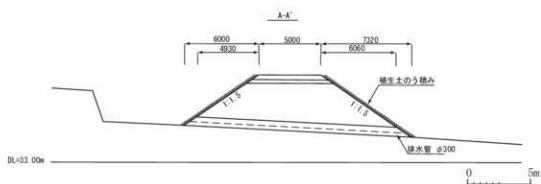
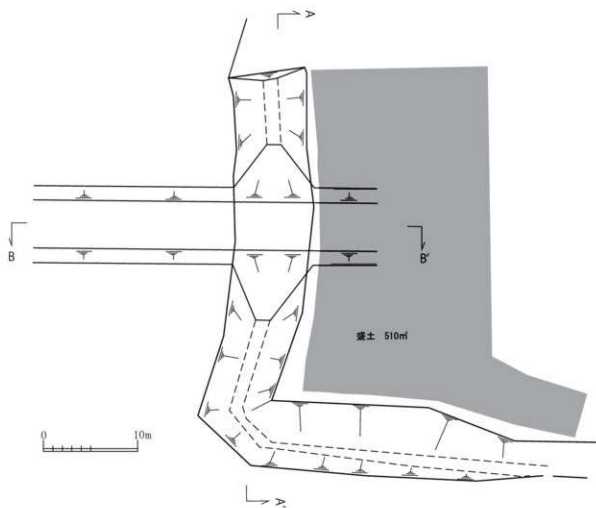
平成17年度に造成した作業用通路から内郭に入るため、壕の一部（40㎡）を埋め、作業用通路を造成する工事を計画した。壕は最下部に排水用の暗渠管を設置し、洗砂・シラスによって埋め、法面は植生土の

う積みによって崩落を防止した。

また、内郭の一部510㎡に上層シラス（ $t=30\text{cm}$ ）、下層洗砂（ $t=30\text{cm}$ ）の保護盛土を実施した。



第4図 平成18年度工事対象範囲図



第5図 平成18年度工事設計図



塚盛土着工前 (N→)



塚盛土完成 (N→)



塚盛土砂搬入 (NW→)



塚盛土砂転圧状況 (W→)



塚盛土植生土のう設置状況 (N→)



塚盛土暗渠管設置状況 (E→)



塚盛土着工前 (W→)



塚盛土完成 (W→)



内郭盛土着工前 (W→)



内郭盛土完成 (W→)



内郭盛土砂敷均し状況 (E→)

内郭盛土砂転圧状況 (W→)

内郭盛土砂厚さ測定状況 (S→)



内郭盛土シルス搬入状況 (N→)

内郭盛土シルス転圧状況 (W→)

内郭盛土シルス厚さ測定状況 (S→)

2. 平成19年度

平成18年度に実施した内郭の保護盛土箇所から北側へ保護盛土を延ばす工事と、南壕～東側の一部にかけて壕の埋戻しと法面工を計画した。

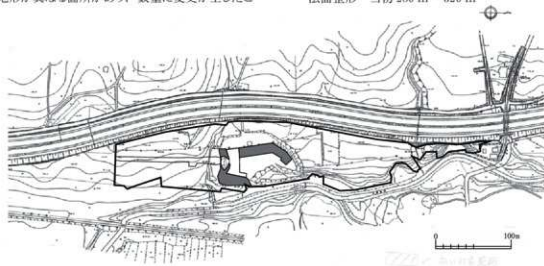
当初の設計から、工事施工に際し設計した地形と実際の地形が異なる箇所があり、数量に変更が生じたこ

とと事業促進のため、内郭平場の保護盛土を増工した。

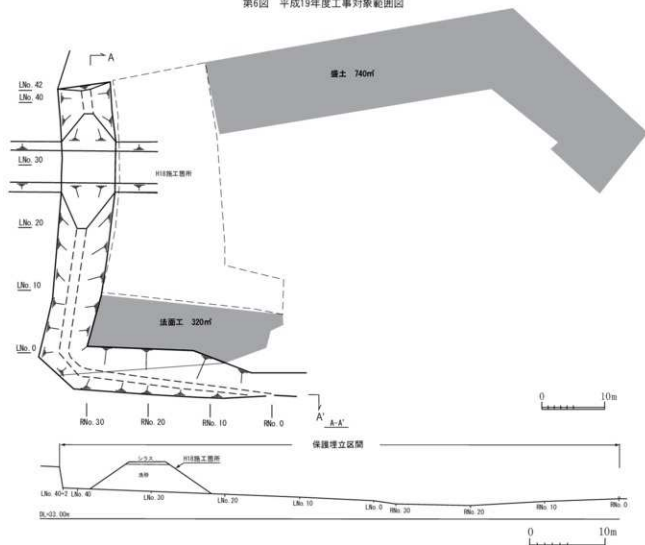
盛土(シラス) 当初130㎡→570㎡

内郭盛土 当初60㎡→740㎡

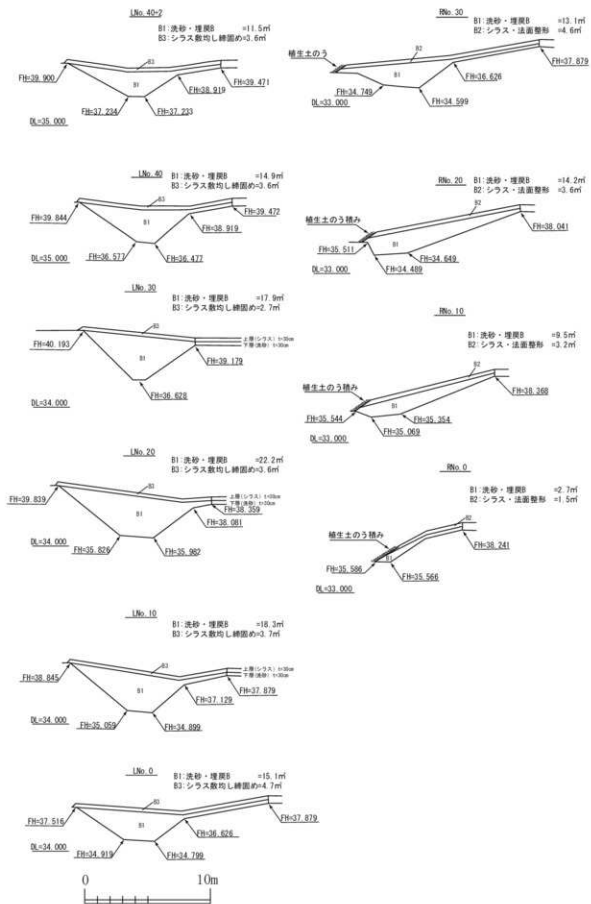
法面整形 当初280㎡→320㎡



第6図 平成19年度工事対象範囲図



第7図 平成19年度工事設計図①



第8図 平成19年度工事設計図②



塚盛土・法面工着工前 (E→)



塚盛土・法面工完成 (E→)



塚盛土・法面工砂敷均し状況 (S→)



塚盛土・法面工植生土のう積上げ状況 (SE→)



南西側塚盛土着工前 (NE→)



南西側塚盛土完成 (NE→)



南西側塚盛土敷均し状況 (E→)



南西側塚盛土転圧状況 (E→)



内郭盛土着工前 (S→)



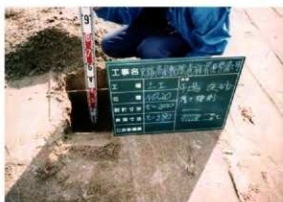
内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土砂数均し状況 (N→)



内郭盛土幅測定状況 (E→)



内郭盛土砂厚さ測定状況 (S→)



内郭盛土シラス転圧状況 (S→)



内郭盛土法面補正状況 (W→)

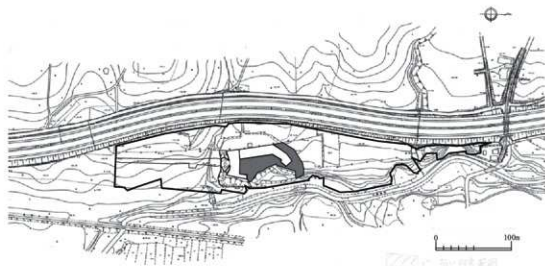


内郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

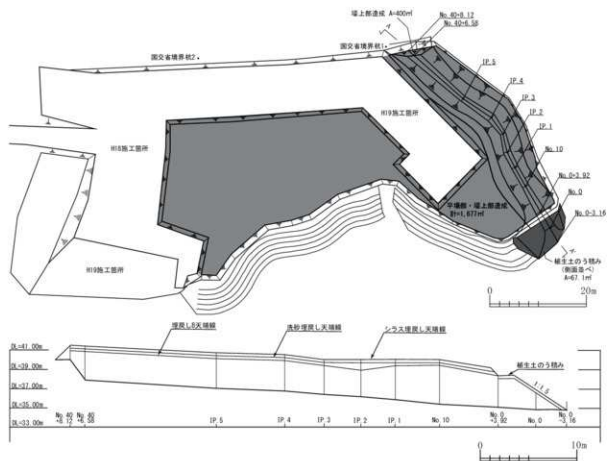
3. 平成20年度

平成19年度までに実施した内郭の保護盛土箇所から、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行った北壕の埋戻しと法面工、内郭の748㎡を対象とした保護盛土を計画した。

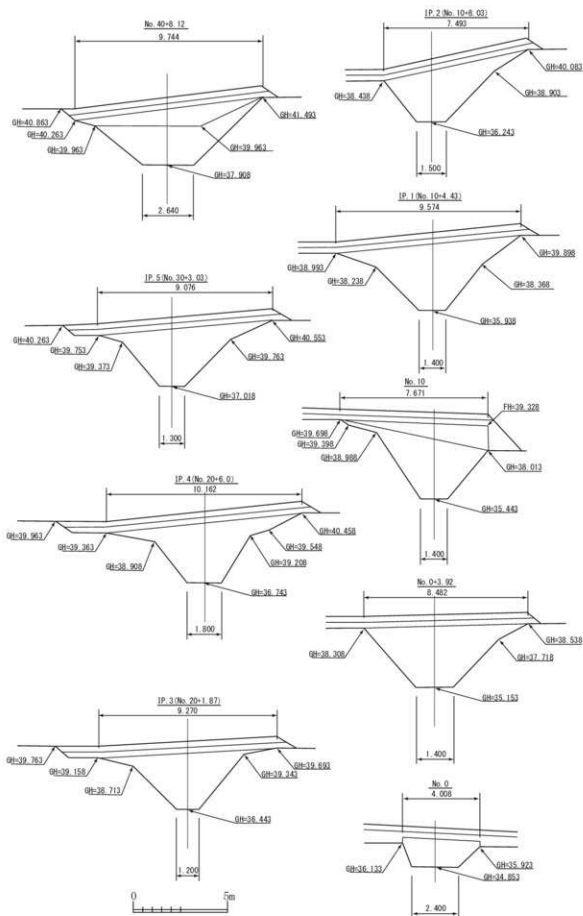
工事に際し、内郭の平場の保護盛土について増工し、平場と壕上部の土工について1,677㎡を対象に工事を実施した。



第9図 平成20年度工事対象範囲図



第10図 平成20年度工事設計図①



第11図 平成20年度工事設計図②



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土シラス敷均し状況 (S→)



内郭盛土幅測定状況 (S→)



法面工着工前 (W→)



法面工完成 (W→)



壕盛土敷均し状況 (N→)

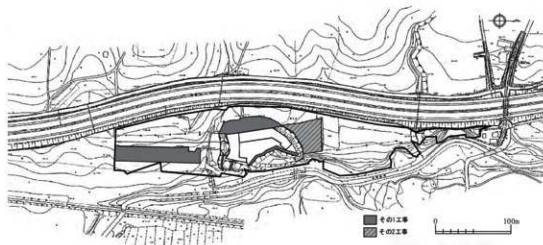


壕盛土転圧状況 (S→)

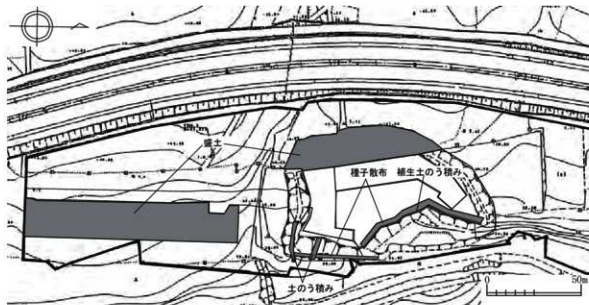
4. 平成21年度

内郭の西側の地区(1,090㎡)と史跡南側の作業道路の東側(1,500㎡)を対象とした保護盛土と内郭東側斜面の植生土のう積み(74.0㎡)、種子散布(340.0㎡)

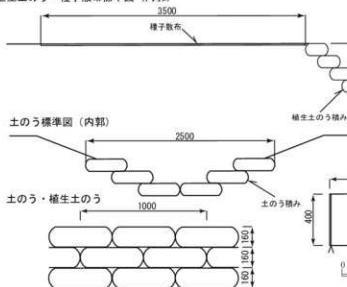
等の工事(その1工事)と、主要部の北側(999㎡)を対象とした保護盛土工事(その2工事)の二つの工事を実施した。



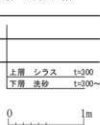
第12図 平成21年度工事対象範囲図



植生土のう・種子散布標準図(内郭)



盛土標準図(内郭・外郭平場)



第13図 平成21年度工事(その1)設計図



内郭盛土着工前 (N→)



内郭盛土完成 (N→)



内郭土のう工着工前 (W→)



内郭土のう工完成 (W→)



内郭土のう工着工前 (W→)



内郭土のう工完成 (W→)



内郭植生土のう工・種子吹付着工前 (N→)



内郭植生土のう工・種子吹付完成 (N→)



内郭植生土のう積み状況 (S→)



内郭盛土敷均し状況 (N→)



内郭盛土転圧状況 (E→)



内郭土のう積み状況 (ES→)



外郭盛土着工前 (S→)



外郭盛土完成 (S→)



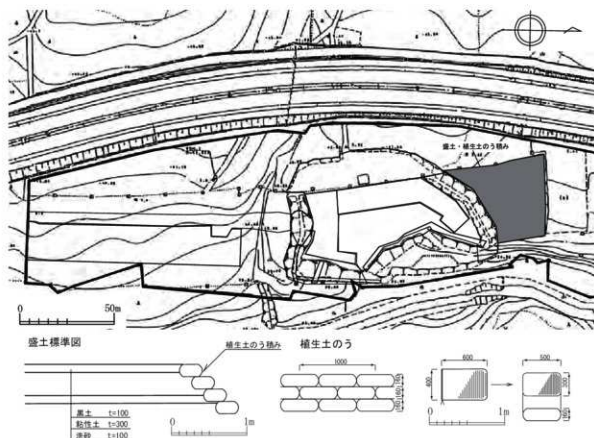
外郭盛土敷均し状況 (W→)



外郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

その2工事は最下層に洗砂 (t=10cm)、中層に粘性土 (t=30cm)、表層に黒色土 (t=10cm) で盛土を行い、東側の斜面には植生土のう積みを実施した。

なお、事業促進のため、保護盛土 (L=27m→35m) と植生土のう積み面積 (24㎡→29㎡) を増工している。



第14図 平成21年度工事（その2）設計図



盛土着工前 (SE→)



盛土完成 (SE→)



盛土砂敷均し状況 (SE→)



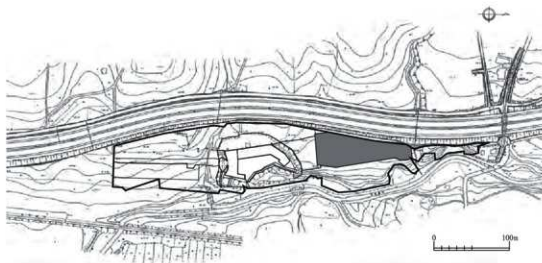
盛土黒土敷均し状況 (SE→)

写真8 平成21年度工事（その2）写真

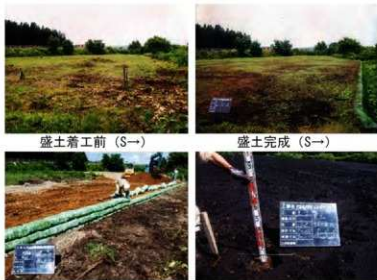
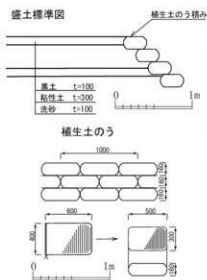
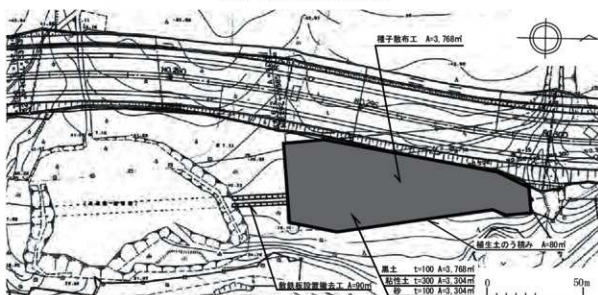
5. 平成22年度

平成21年度対象地の北側2,992 mを対象に、前年度と同様の盛土、法面には植生土のう積みを行い、

加えて種子散布を実施した。なお、事業促進のため、対象面積を3,768 m²に増工している。



第15図 平成22年度工事対象範囲図



植生土のう積み上げ状況 (SE→) 盛土黒土厚さ計測状況 (W→)

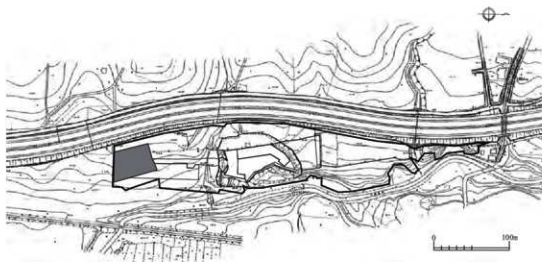
第16図 平成22年度工事設計図

写真9 平成22年度工事写真

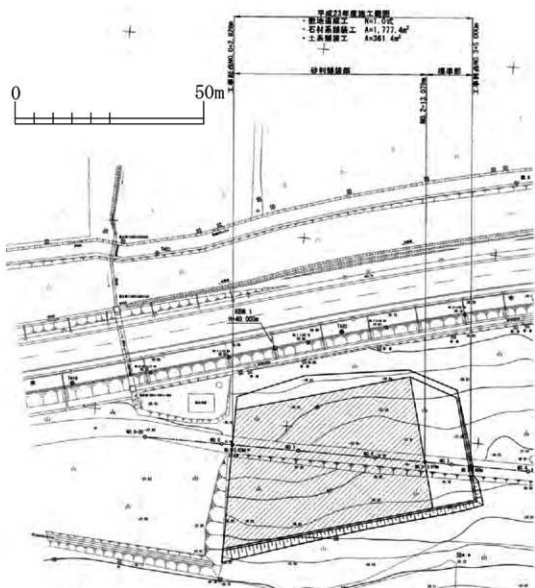
6. 平成23年度

史跡範囲南端の1,777㎡を対象に、敷砂利を行う計画で工事実施した。なお、工事途中で盛土の土量が

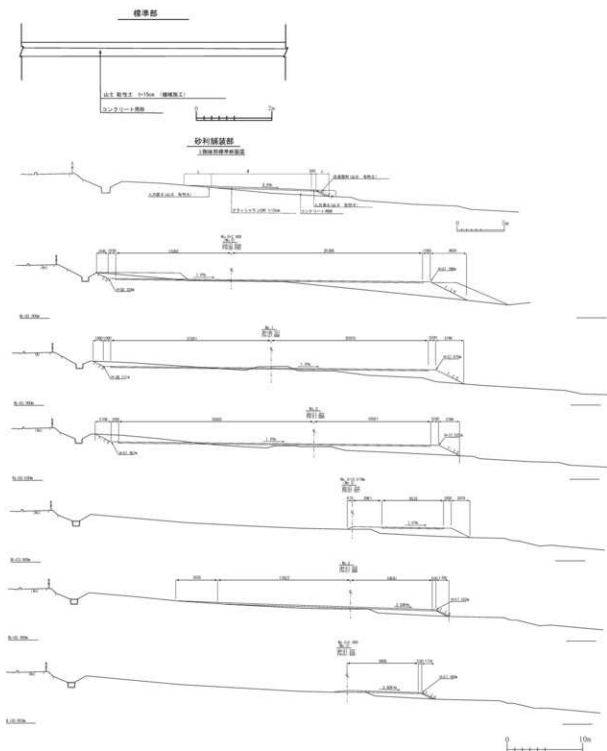
想定より増加したため、敷砂利面積を250㎡に変更し、法面部分の植生土のう積みを追加している。



第17回 平成23年度工事対象範囲図



第18回 平成23年度工事設計図①



第19図 平成23年度工事設計図②



盛土着工前 (S→)



盛土完成 (S→)

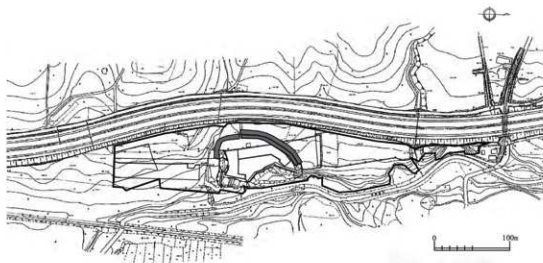


盛土転圧状況 (E→)

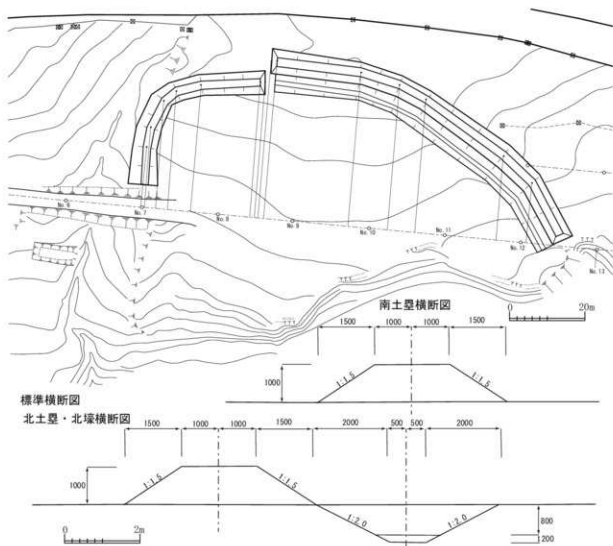
7. 平成24年度

内部の西側の土塁（北土塁 $L=95.12\text{ m}$ 、南土塁 50.62 m ）と北壕（ $L=95.12\text{ m}$ ）を対象に工事実施

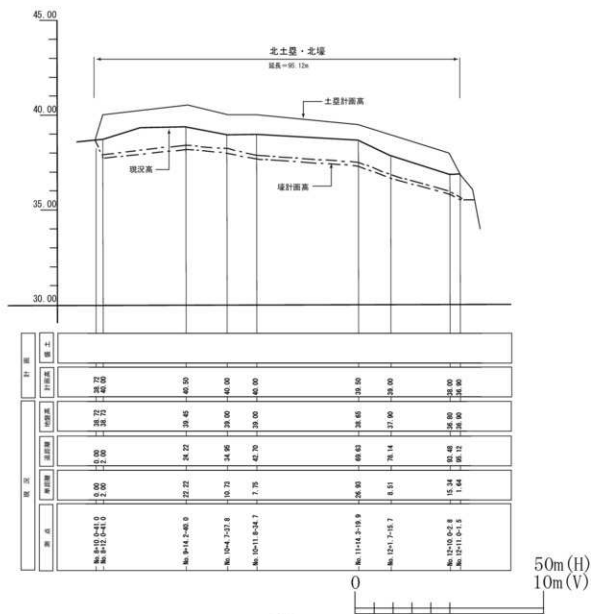
した。また、法面について、土塁は $1:1.5$ 、壕は $1:2.0$ を基本として造成した。



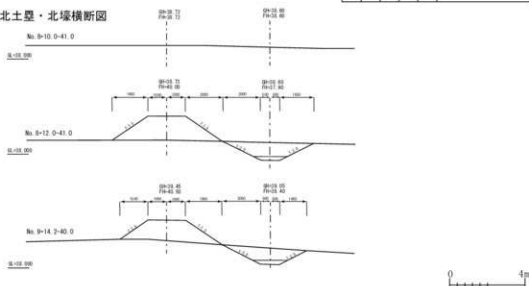
第20図 平成24年度工事対象範囲図

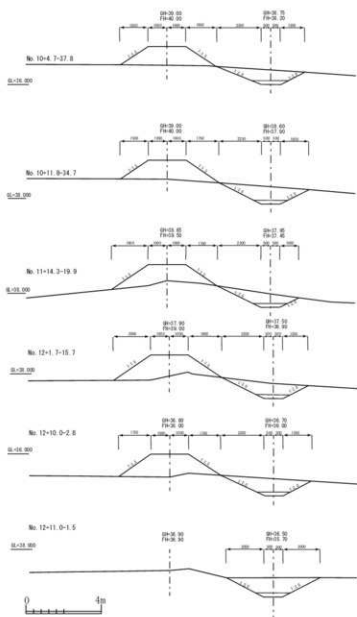


第21図 平成24年度工事設計図①



北土塁・北塚横断面





第23図 平成24年度工事設計図③



北土壘着工前 (S→)



北土壘完成 (S→)



南土壘着工前 (E→)



南土壘完成 (E→)



北土壘盛土状況 (N→)



北土壘盛土転圧状況 (S→)



北壕掘削状況 (S→)



北壕整形状況 (N→)

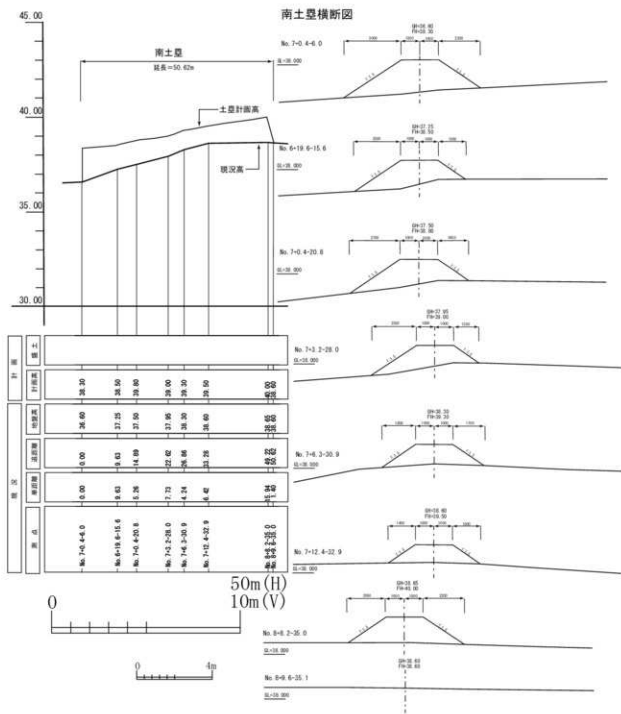


北壕底赤土敷均し状況 (S→)



南土壘盛土転圧状況 (E→)

写真11 平成24年度工事写真

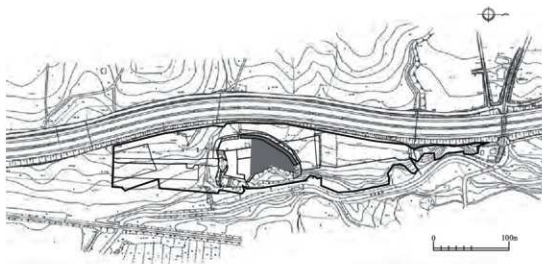


第24回 平成24年度工事設計図④

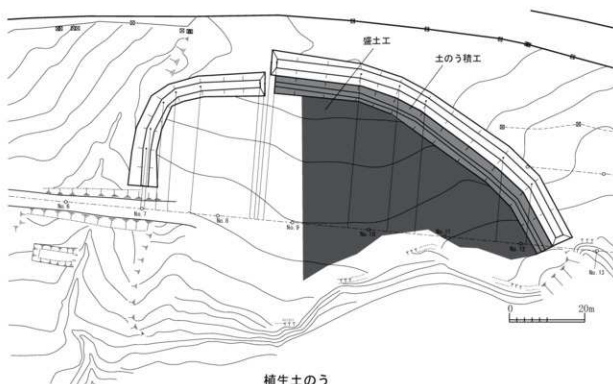
8. 平成25年度

平成24年度に掘削した内郭の北壕(L=95.12m, 253m)を対象に植生土のう積みを行い、また、内郭

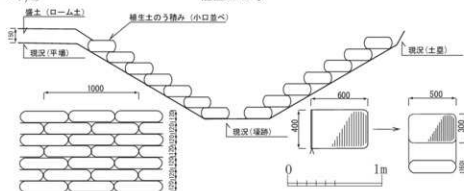
の平場1,628m²を対象に厚さ15cmの粘性土の保護盛土工事を実施した。



第25図 平成25年度工事対象範囲図



植生土のう



第26図 平成25年度工事設計図



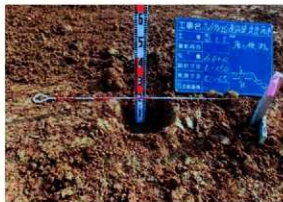
内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土作業状況 (S→)



内郭盛土厚さ測定 (S→)



北壕植生土のう積工着工前 (N→)



北壕植生土のう積工完成 (N→)



植生土のう作成状況

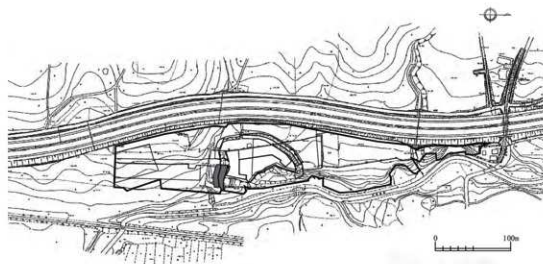


北壕植生土のう積み上げ状況 (S→)

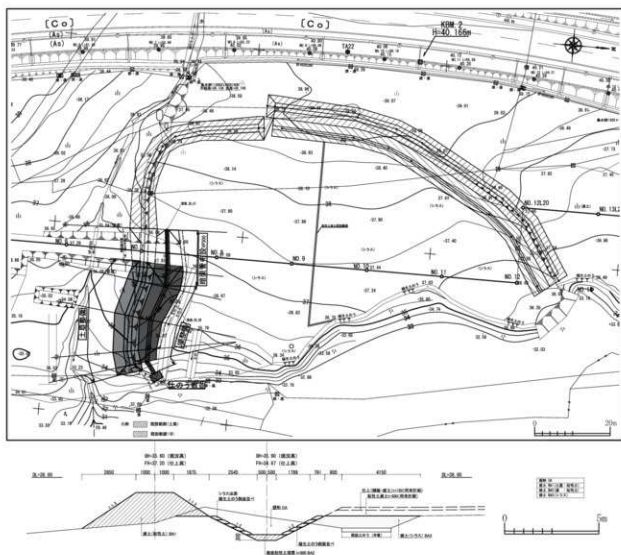
9. 平成26年度

南壕の工事用作業用道路より東側の地区を対象に、土塁 (L=30.15 m、162.2 m) と壕 (L=24.81 m) の

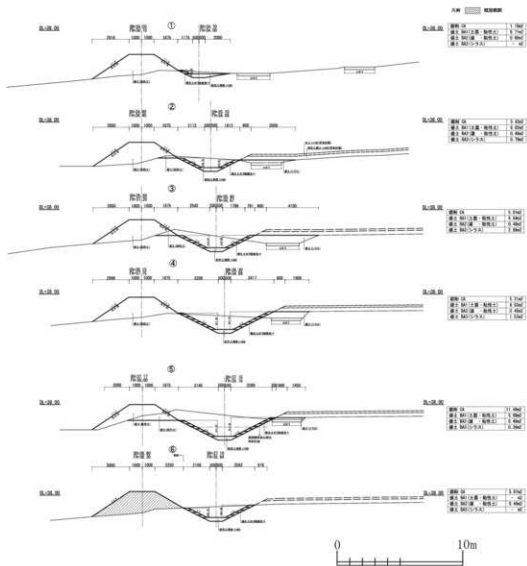
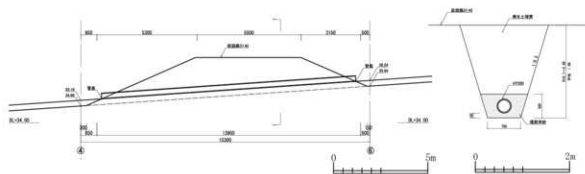
造成工事を実施した。また、VP300の暗渠管 (14 m) を設置した。



第27図 平成26年度工事対象範囲図



第28図 平成26年度工事設計図①



第29回 平成26年度工事設計図②



土壘盛土着工前 (E→)



土壘盛土完成 (E→)



土壘盛土作業状況 (E→)



土壘盛土作業状況 (E→)



土壘盛土天端計測状況 (E→)



土壘盛土法面計測状況 (E→)



塚完成 (E→)



塚掘削状況 (SE→)



塚底部粘性土数均し状況 (E→)



塚底部粘性土厚さ確認状況 (E→)



植生土のう積上げ状況 (W→)



植生土のう積上げ高さ確認状況 (E→)



暗渠管設置状況 (E→)

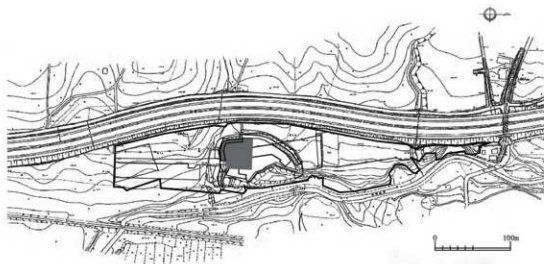


暗渠管設置完成 (NW→)

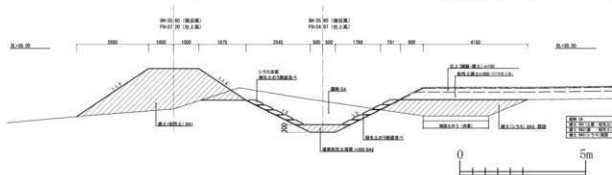
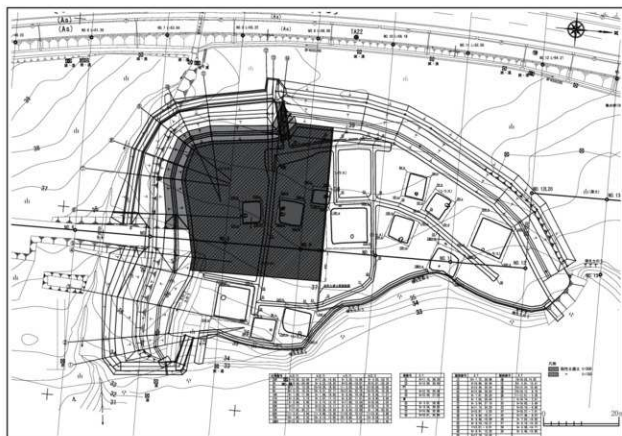
10. 平成27年度

南壕の工事用作業用道路より西の壕 (L=43.86 m)
の掘削及び植生土のう積み、内郭平場 1,300 m²の保護

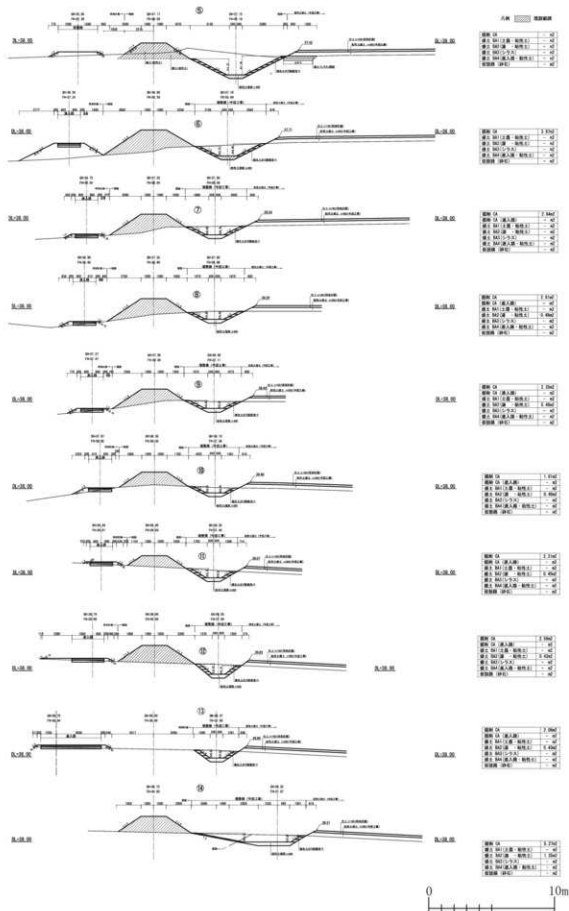
盛土工事 (厚さ t=30cm) を実施した。



第30図 平成27年度工事対象範囲図



第31図 平成27年度工事設計図①



第32図 平成27年度工事設計図②



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土着工前 (N→)



内郭盛土完成 (N→)



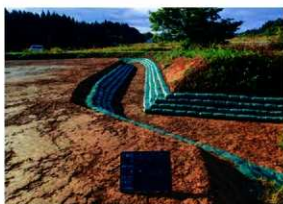
内郭盛土敷均し状況 (W→)



内郭盛土厚さ計測状況 (S→)



壕着工前 (N→)



壕完成 (N→)



塚掘削状況 (S→)



塚底部粘性土敷均し状況 (N→)



塚底部粘性土厚さ確認 (S→)



植生土のう積上げ状況 (E→)



植生土のう高さ確認状況 (S→)

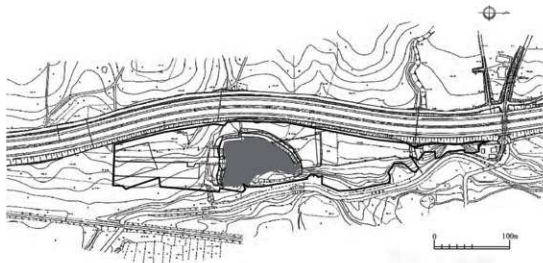


植生土のう積上げ完成 (E→)

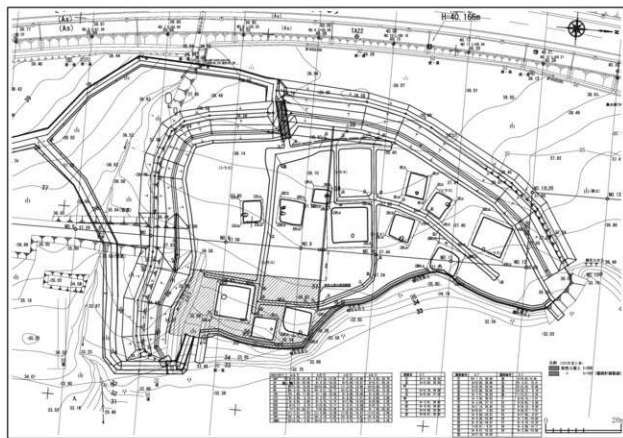
写真16 平成27年度工事写真②

11. 平成28年度

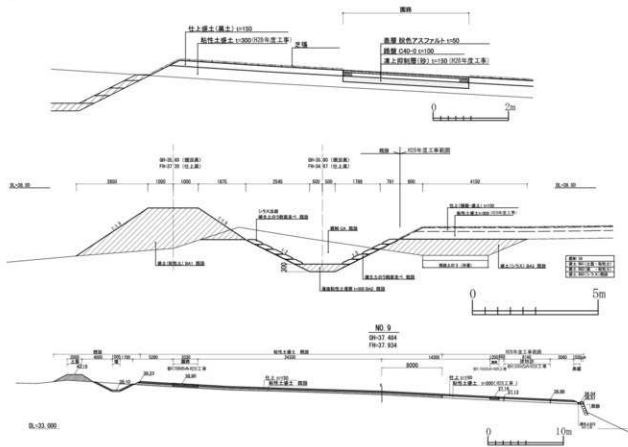
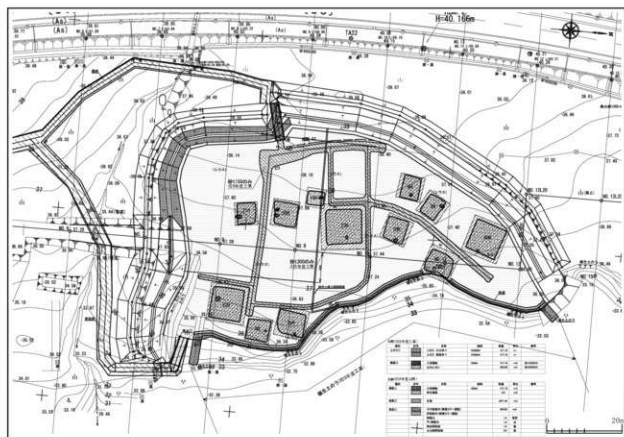
内郭の南東側の保護盛土(厚さ $t=30\text{cm}$)と竪穴建物跡(19H除く)、園路の凍上抑制層を形成する工事を実施した。



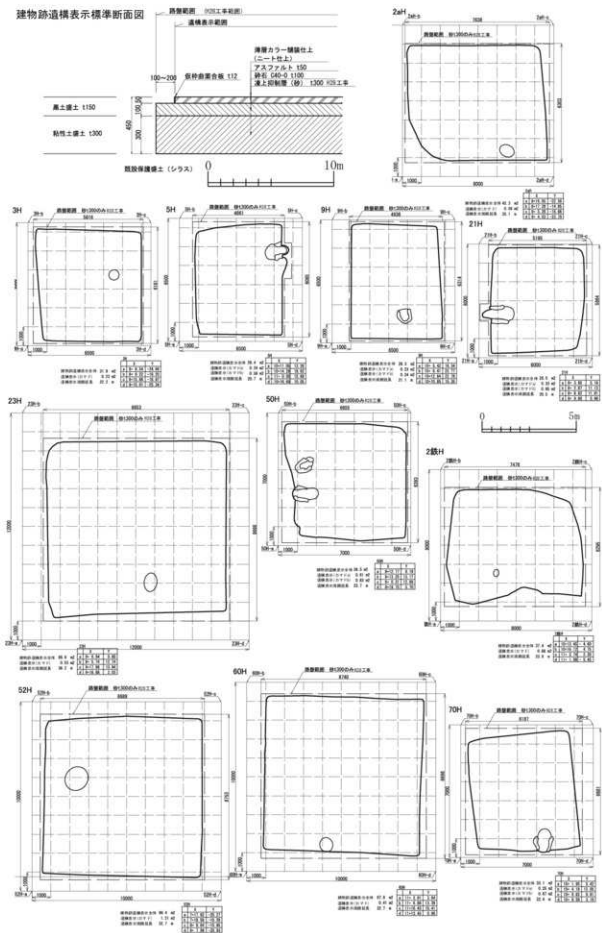
第33図 平成28年度工事対象範囲図



第34図 平成28年度工事設計図①



第35図 平成28年度工事設計図②





内郭着工前 (S→)

内郭東斜面着工前 (S→)

内郭盛土敷均し状況 (N→)

内郭完成 (S→)

内郭東斜面完成 (S→)

内郭盛土転圧状況 (S→)

内郭盛土厚さ確認状況 (S→)

植生土のう積上げ状況 (S→)

園路掘削状況 (S→)

園路凍上抑制層完成 (S→)

園路凍上抑制層出来形測定 (S→)

園路凍上抑制層厚さ測定 (S→)

5H凍上抑制層転圧状況 (S→)

5H凍上抑制層完成 (S→)

5H凍上抑制層厚さ確認 (S→)

2鉄H凍上抑制層転圧状況 (S→)

2鉄H凍上抑制層完成 (S→)

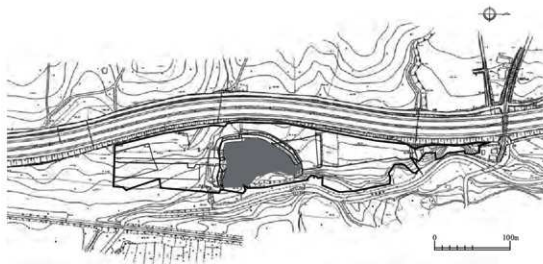
2鉄H凍上抑制層厚さ確認 (S→)

写真17 平成28年度工事写真

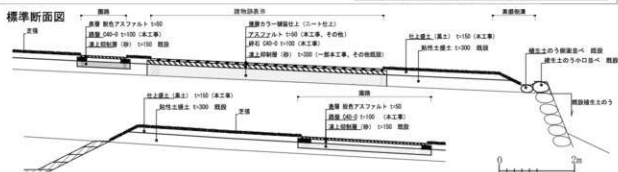
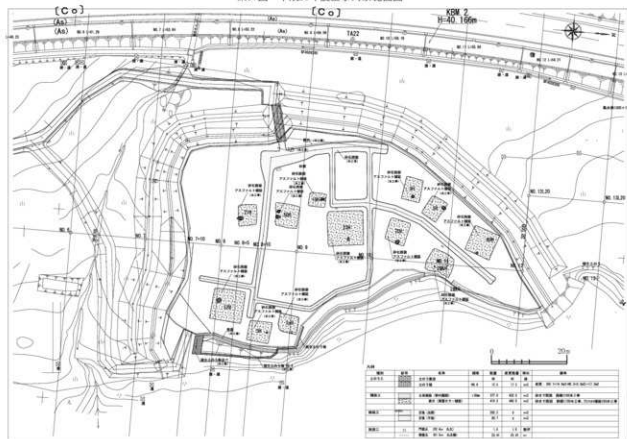
12. 平成29年度

平成28年度に未施工の堅穴建物跡(19H)の凍上抑制層の形成と堅穴建物跡全棟のアスファルト舗装及

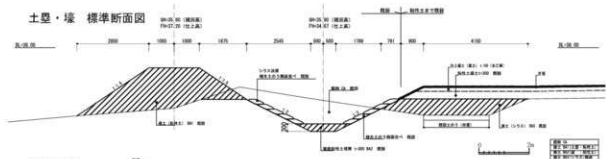
び園路の路盤工事を実施した。また、立体表示として櫓列と門の復元工についても実施した。



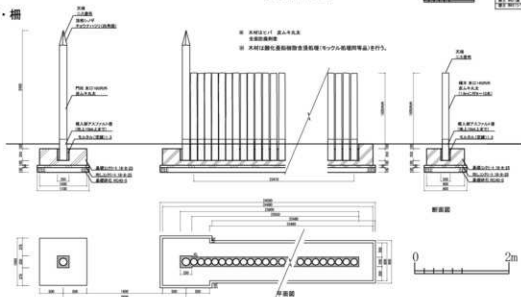
第37図 平成29年度工事対象範囲図



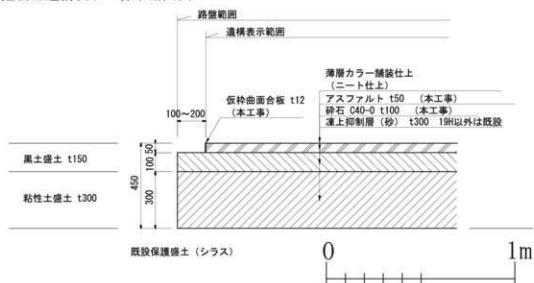
第38図 平成29年度工事設計図①

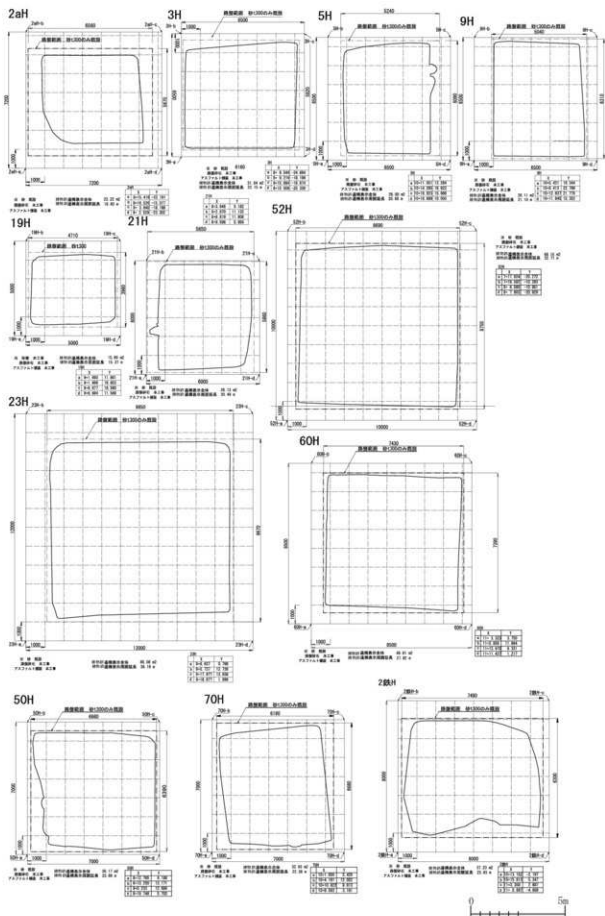


門柱・櫓



建物跡遺構表示 標準断面図





第40図 平成29年度工事設計図③



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (SW→)



完成 (SW→)



着工前 (SW→)



完成 (SW→)



法面整形状況 (S→)



黒土敷均し状況 (SW→)



植生土のう積み状況 (S→)



植生土のう積み高さ測定状況 (S→)



植生土の敷並べ作業状況 (S→)



植生土の敷並べ完成 (E→)



門・柵列復元工掘削状況 (N→)



門・柵列復元工コンクリート打設状況 (N→)



門復元工型枠組立状況 (S→)



門・柵列復元工コンクリート仕上げ状況 (S→)



キシラデコール塗布状況【1回目】(N→)



基部アスファルト塗布状況(W→)



門復元工建込状況(E→)



門・柵列復元工モルタル仕上げ状況(N→)



キシラデコール塗布状況【2回目】(S→)



天端部ニス塗布状況(E→)



園路舗装路盤工砕石敷均し状況(S→)



園路舗装路盤工出来高測定状況(W→)



建物跡表示人力掘削状況〔19H〕（E→）



建物跡表示凍上抑制層転圧状況〔19H〕（E→）



建物跡表示碎石敷均し状況〔23H〕（SW→）



建物跡表示型枠組立状況〔23H〕（E→）



建物跡表示舗装状況〔23H〕（E→）



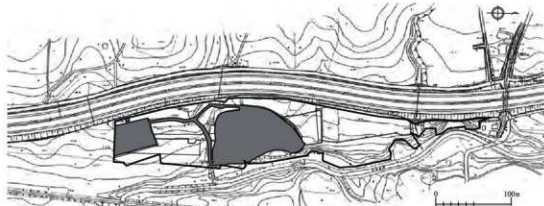
建物跡表示仮枠コンクリート撤去状況〔23H〕（SW→）

写真21 平成29年度工事写真④

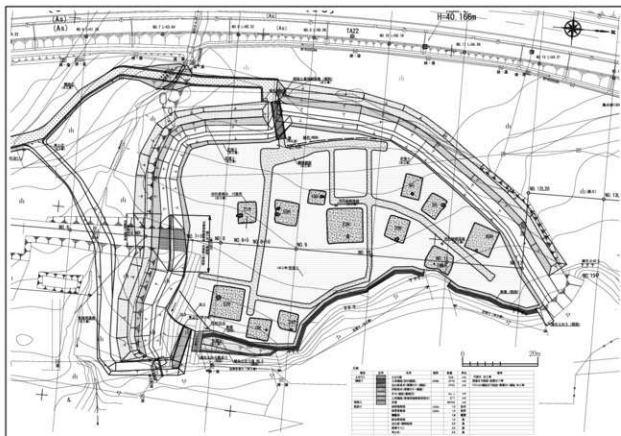
13. 平成30年度

平成29年度に実施した堅穴建物跡のアスファルト舗装上に薄層カラー舗装を施し、カマド位置の表示を

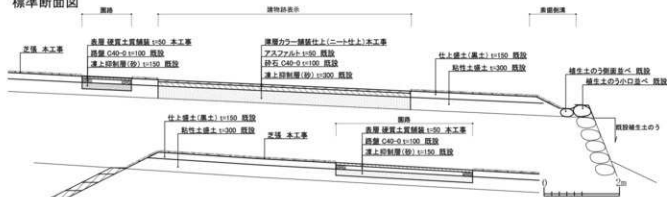
実施した。また、園路については、土系の硬質土質舗装（カラーサンド）及びダスト舗装を表層に実施し



第41図 平成30年度工事対象範囲図



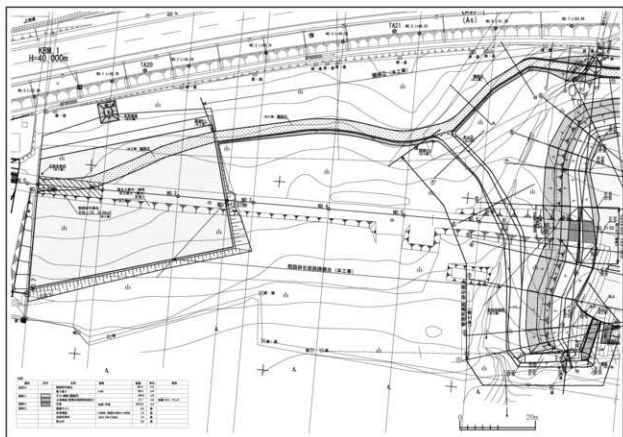
標準断面図



第42図 平成30年度工事設計図①

た。その他、横復元工を西側の1箇所実施し、遺跡解説板1基、遺構解説板3基、誘導板3基を設置した。また、内郭及び史跡南側の広場部分に芝張を実施し、国土交通省が整備する簡易パーキングに近接する史跡南端部分に史跡名称柱1基、国道7号浪岡

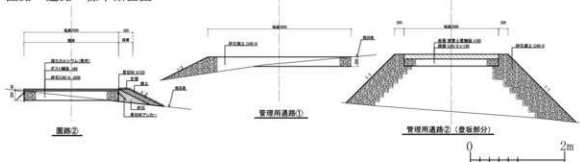
バイパスに近接する位置に史跡名称標識1基を設置した。平成17・18年度に造成した仮設道路について、現況地形を優先する形で除却し、園路から分岐する管理用道路を新設した。



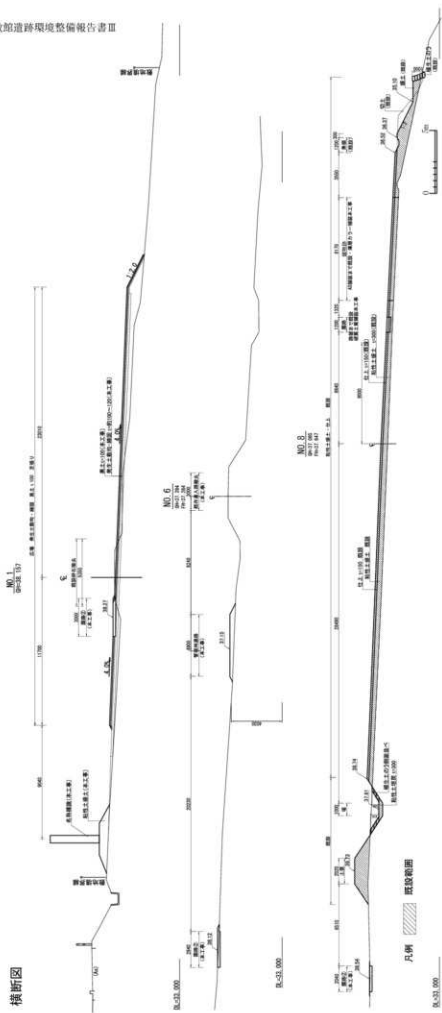
土塁・壕 標準断面図



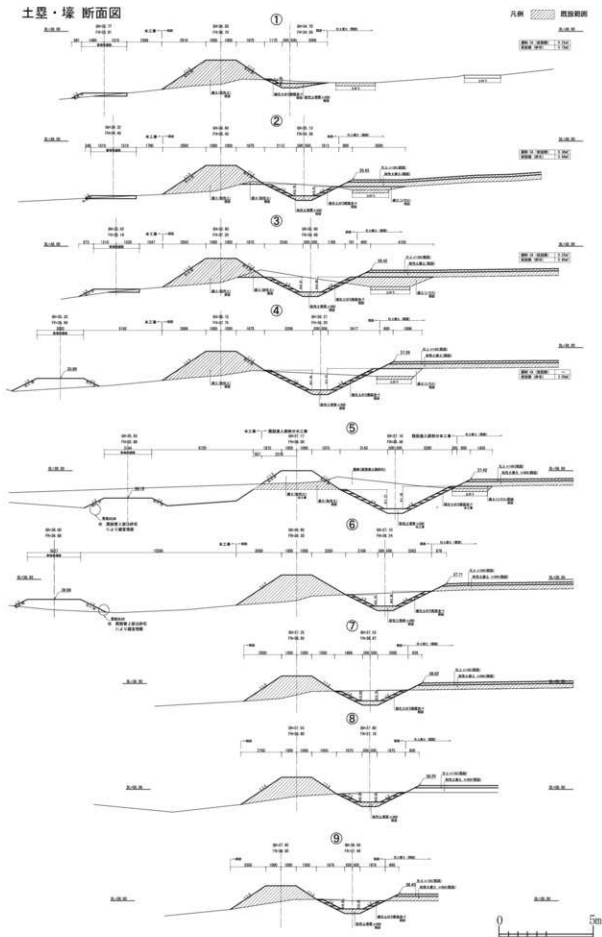
園路・通路 標準断面図



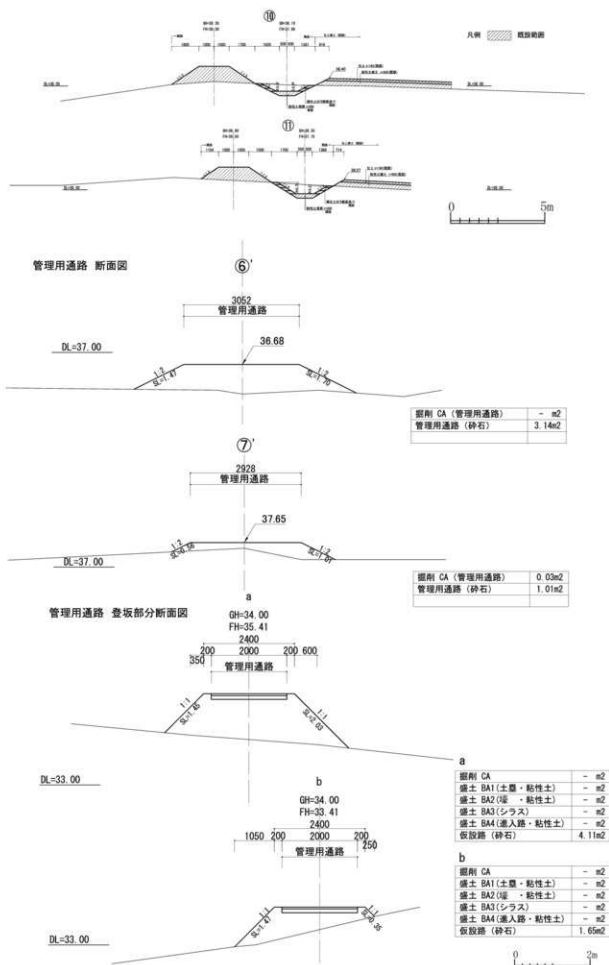
第43図 平成30年度工事設計図②



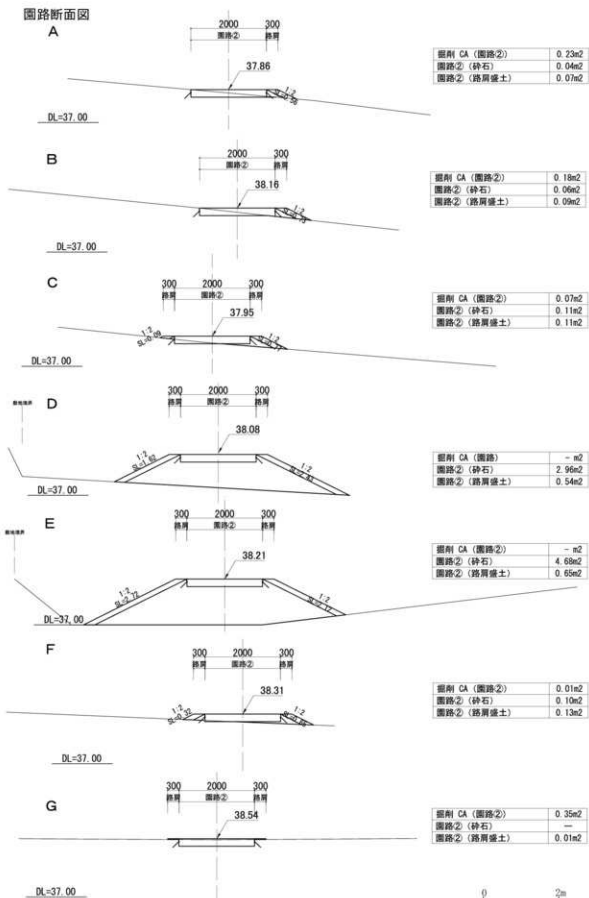
第44図 平成10年度工事断面計画③



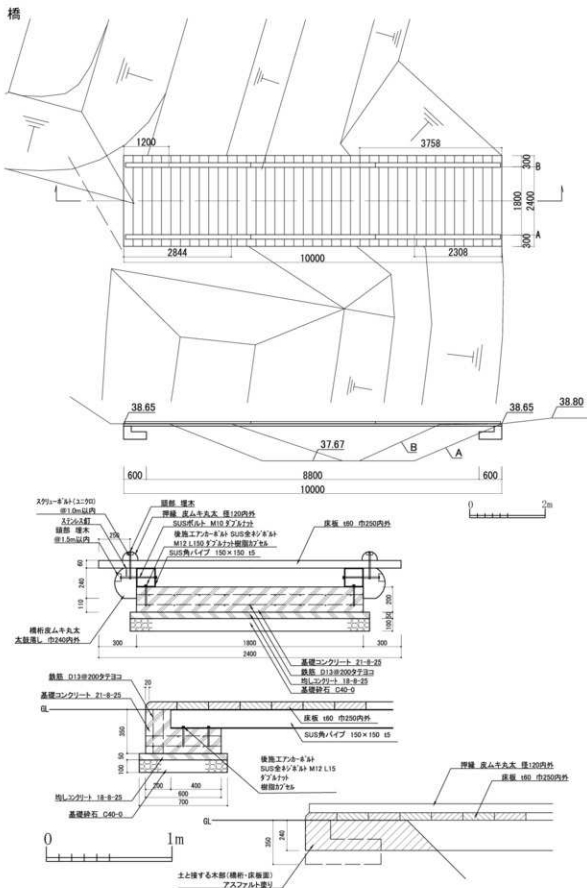
第45図 平成30年度工事設計図④



第46図 平成30年度工事設計図⑤

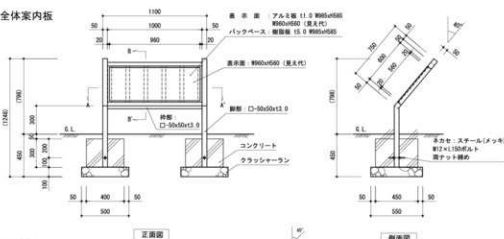


第47回 平成30年度工事設計図⑥

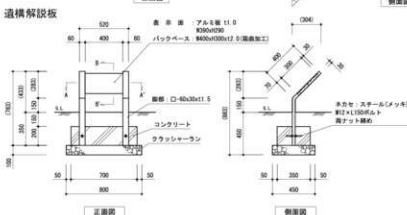


第48図 平成30年度工事設計図⑦

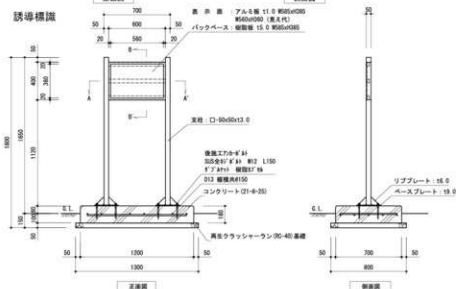
全体案内板



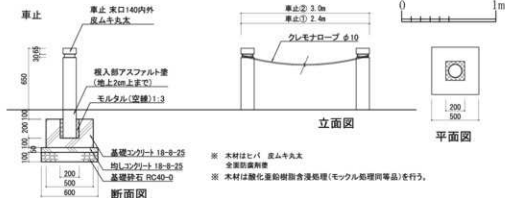
遺構解説板



誘導構造物



車止



- ※ 木材はヒバ 皮ムキ丸太
- ※ 全面防雨処理
- ※ 木材は酸化亜鉛樹脂含浸処理(モックル処理同等品)を行う。

第50図 平成30年度工事設計図⑨



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (E→)



完成 (S→)



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (S→)



完成 (S→)



园路基面整正作業 (E→)



园路型枠設置寸法測定 (N→)



园路舗装作業状況 (S→)



园路舗装仕上状況 (S→)



园路舗装出来高測定状況 (E→)



园路舗装厚さ確認状況 (S→)



管理用通路碎石盛土敷均し・転圧状況 (N→)



管理用通路完成 (N→)



法面（土壘）下草除去状況（W→）



法面（土壘）芝張状況（W→）



平場耕運作業状況（S→）



平場芝張作業状況（E→）



旧作業用仮設道路（塚）既設排水管撤去状況（N→）



旧作業用仮設道路（塚）植生土のう設置状況（W→）



建物跡平面表示薄層カラー舗装作業状況（SE→）



建物跡平面表示薄層カラー舗装作業状況（E→）



橋基礎掘削状況 (N→)



橋基礎コンクリート打設状況 (N→)



橋基礎コンクリート出来形測定状況 (N→)



橋完成 (W→)



遺構説明板基礎コンクリート出来形測定状況 (W→)



全体案内板完成 (W→)



史跡名称標識完成 (N→)



史跡名称柱完成 (S→)

第三章 資料編

高屋敷館遺跡は、平成6・7年度に国道7号浪岡バイパス建設事業に先立つ発掘調査が青森県埋蔵文化財調査センターにより実施され、報告書は平成10年3月に刊行されている（青森県教育委員会1998）。その後、遺跡の重要性から保存が決定され、平成13年1月に国史跡指定された。また、バイパスは、西側を迂回するルートが設定された（浪岡町教育委員会2001）。迂回ルートは、野尻(3)遺跡及び山元(1)遺跡を通る形であったが、平成17年度に刊行された報告書では、『高屋敷館遺跡Ⅲ』として調査・報告されている（青森県教育委員会2005）。また、さらに北側の迂回ルートの接続部分について、『野尻(3)遺跡Ⅱ』として調査・報告されている（青森県教育委員会2006）。

高屋敷館遺跡の調査結果を契機に、三浦圭介氏を中心として、いわゆる「防衛性集落論」が高まり、平成17年には蝦夷研究会の青森大会において論の成果が集約され、翌年刊行された『北の防衛性集落と激動の時代』にまとめられている（三浦・小口・斉藤2006）。

「防衛性集落論」については異論があり、結果と評する論（工藤1997）や、「囲郭集落」と呼称する論（八木2011）も存在する。八戸市林ノ前遺跡の成果（青森県教育委員会2006ほか）や、新田(1)遺跡をはじめとする石江遺跡群の成果（青森市教育委員会2014ほか）などでも慎重な取扱いがなされていたが、近年、青森県外ヶ浜町山本遺跡の測量成果を基

に、三重の壕と土塁が伴う集落が想定され¹⁾（関根2017）。防衛性に関する認識が再び強まり、平成30年に刊行された『青森県史通史編1』でも防衛性集落としての項が設けられ、高屋敷館遺跡は防衛性集落の代表遺跡として取り扱われている²⁾（青森県2018）。

その他、筆者が確認・報告した山元(1)遺跡内にある、土塁と壕を持つと想定される方形区画施設（木村2015）は、発掘調査が未実施ではあるが、巻首図版2下段の写真のとおり、高屋敷館遺跡の土塁や柵より高い位置から視認可能な場所にあり、地元民が「高屋敷」と呼ぶ本来の場所として蓋然性が高いものと思われる³⁾。

平成6・7年度の発掘調査における調査資料は、発掘調査担当機関であった青森県埋蔵文化財調査センターが長らく保存・管理してきたが、史跡整備が進行し、事業の最終年度が平成30年度と確定した平成28年度に譲与を受けた。

譲与資料のうち、出土遺物について確認したところ、非掲載資料の中に、羽釜や墨書土器・刻書土器・捺文土器等が含まれることが判明し、作図・計量等資料化した。

また、平成10年に報告された橋脚の年輪年代測定の結果についても、酸素同位体を併せた年輪年代測定法によって精度の高い研究が行われていることから、再分析を依頼した。これらの成果について本章で報告し、整備の内容に反映させることとした。



第51図 高屋敷館遺跡及び周辺遺跡の遺構配置図

註

1) その他、法政大学教授小口雅史氏が行った三次元レーザー測量の成果が一般社団法人日本考古学大会2016年弘前大会の小口氏の講演中で紹介されている。青森県史通史編1の本文については、これらの成果を基にした記述がみられる。

三次元レーザー測量のようなリモートセンシングや踏査に伴う測量は、考古学的調査における調査戦略(Research strategy)を形成する上で重要な役割を果たすものであると海外の概説書でも紹介されているが、併せてそのデータの信頼性や精度をチェック確認する唯一の方法は、発掘調査であることが述べられている(Onofre & Bahn 1991)。

確かに山本遺跡では古代集落跡・土塁・壕跡といういわゆる「防衛性集落」の構成要素が存在し、古代を主体とする遺物が出土したことから、防衛性集落論を強く推した発掘調査とするものもわらない訳ではない。しかしながら、現時点で発掘調査が北海道新幹線建設に伴う外周の限定的な部分に留まり(青森県教育委員会2008ほか)、壕・土塁内の主体部や三重壕の外側に確認された竪穴建物群との関係を把握する調査はなされていない。

岡根氏の論文中にも触れられていたが、集落の複雑な構成構造が現状では古代集落の中に明確な類似がないことや、遺構の時期差および中世に改変されている要素がないか検討を要するという記述は、青森野辺地町向田(35)遺跡で土塁型防衛性集落の主体部とされる地点の溝跡(第36号住居跡横穴)から中世集落が出土した事例(青森県教育委員会2014)や高屋敷遺跡で遺物がほとんど伴わない後代に土地利用が行われたことにも通ずる話であり、看過できない重要な点である。「青森県史通史編1」において山本遺跡を古代の三重壕の防衛性集落とする取扱いについては、十分な発掘調査による検証がなされていない現時点では、あくまでも仮説としての域を脱しないものであり、その位置づけについては、検証するための適切な発掘調査(必要最小限という意味ではなく、情報を整理した上で、検討内容をしっかりと解明するような調査実施)を経た後に評価すべきものと考えられる。

なお、古代における三重壕が検出された事例として、油伝(1)遺跡の事例がある(弘前市教育委員会2014)。しかしその内容は、部分的に検出された事例、かつ溝の土層堆積状況に限り返しの痕跡が見られ、同時性が保証されない要素が含まれる。溝出土史料の年代値は11世紀前～12世紀中葉の結果で、出土遺物は古代中心ではあるものの、「防衛性集落」の時期より下った時期となる可能性が高い。

2) 前掲註1) 用語として弥生時代と同様の「壕」が用いられているが、「壕」や「壕」などの用語との取扱いに関する定義は凡例中には取り上げられていない。また、野尻(4)遺跡と山元(1)遺跡の中にある区画施設について高屋敷遺跡の前段として捉えているが、野尻(4)遺跡(青森県教育委員会1996)の壕跡については①壕跡より新しいとされる3期の外周溝(196溝)が限定的な検出・記録に留まり、196溝の西側の壕跡上の部分に同規模の溝状の掘り込みがあり、その掘り込みは、壕外に連なる122溝に連結する位置関係にある。②北側にある同規模かつ壕外に延びる161溝(配設図上では112溝)は、第V-6-(1)-2B区Bラインの上層記録は触れられていないが、第2・7・8層が実質相当し、B-βラインと近接したレベル(水準情報の記載がないので相対的な比較による)がある。112溝と122溝は新旧関係が存在しながらも、近接した時期での使用が想

定される。このことから196溝について、外周溝ではなく後代の溝であった可能性がある。あくまでも記録保存資料の発掘調査報告書という公表資料を基にした判断ではあるが、その場合、野尻(4)遺跡検出の際は、外周溝に伴う建物群より後代になる可能性が出てくることとなり、高屋敷遺跡の前段階の資料とは必ずしも言い切れない恐れがある。同様に、山元(1)遺跡検出の方形の三重壕(青森県教育委員会2005)の出土遺物は古代主体であるが、10世紀中葉以降とされる竪穴建物群を切った溝で、切られた竪穴建物群からの流れ込み等を含めた評価が必要となり、前段とは言い切れない要素がある。

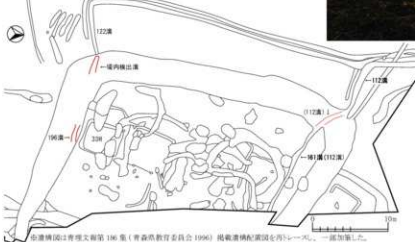
3) 方形区画に関する報告(木村2015)に触れているが、周辺の土地所有者の話によると、方形区画のある場所は、町会の共有地として広場として利用されていたとのこと、周辺の地点より最も標高が高く「高屋敷」という地名の基になったという話であった。

高屋敷遺跡の遺跡登録に関する報告は、既刊報告書(青埋文報第243集)第1章第4節中で触れられており、その内容は、現在高屋敷遺跡として取り扱われている遺跡は「青森県の中世城館」(青森県教育委員会1983)として登録されたという場所(青森県)に相当し、高屋敷遺跡は昭和38年の分布調査の際、別な場所(1km北に位置)の遺跡について登録され、昭和59年に国第7号浪岡ハイバイ計画時の青森県教育委員会による分布調査の結果、高屋敷遺跡の場所に誤りがあること、「野尻(4)」が本遺跡に該当することが確認され、野尻(4)が削除して高屋敷遺跡として登録されたことである(青森県教育委員会1998)。青森県における埋蔵文化財包蔵地名が大字・小字を基に登録されている背景があるため、高屋敷遺跡として登録、史跡指定まで至ったのは事実であるが、遺跡そのものの実態は、9世紀代から続く野尻遺跡南東にある古代最終未施設としての「野尻(4)」の位置づけの方が妥当である。

なお、山元(1)遺跡内の方形区画からは見下ろす位置に高屋敷遺跡が所在しているが、高屋敷遺跡の真南側は沢が一入り、方形区画から延びる低い緩やかな丘陵が広がっている。土塁より南側の丘陵から内部側を見た写真を写真26として掲載したが、内部の地表面と土塁の天端の高さがほぼ同一である状態である。保護のため内部は盛土がなされ、当時の地表面より若干高い状況ではあるが、発掘調査で南側のエリアに棚割が内部や土塁天端に確認されていないことを考えると丸見の状況であったと想定される。外側から土塁を越え侵入し、そのまま5m近い落差の壁に落ちることがある場合は「防溝」と言えるのかもしれないが、周辺から中の状態は視認しやすく、かつ弓矢など外からの攻撃が容易である。



写真26 (参考) 高屋敷遺跡跡南側から内部側を望む

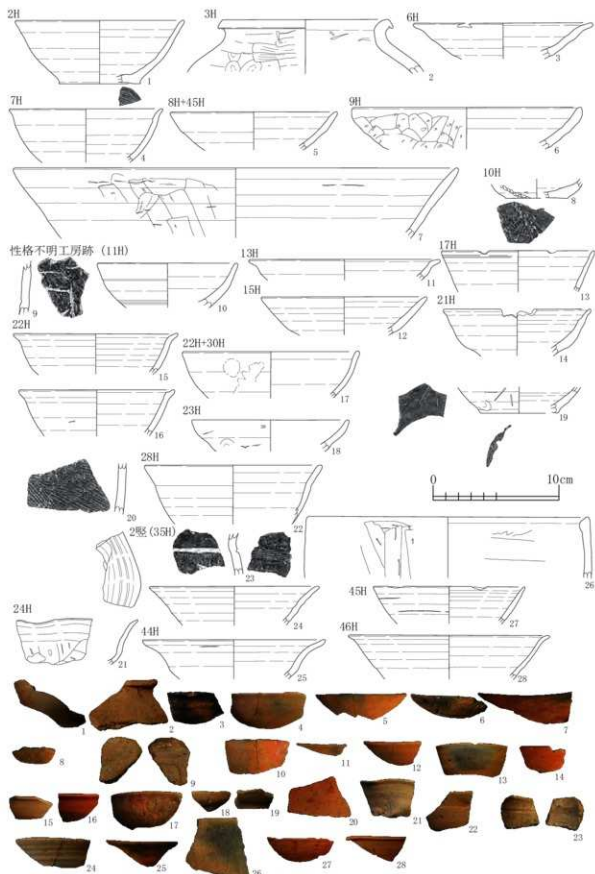


第52図 (参考) 野尻(4)遺跡内壕跡と溝跡の位置関係

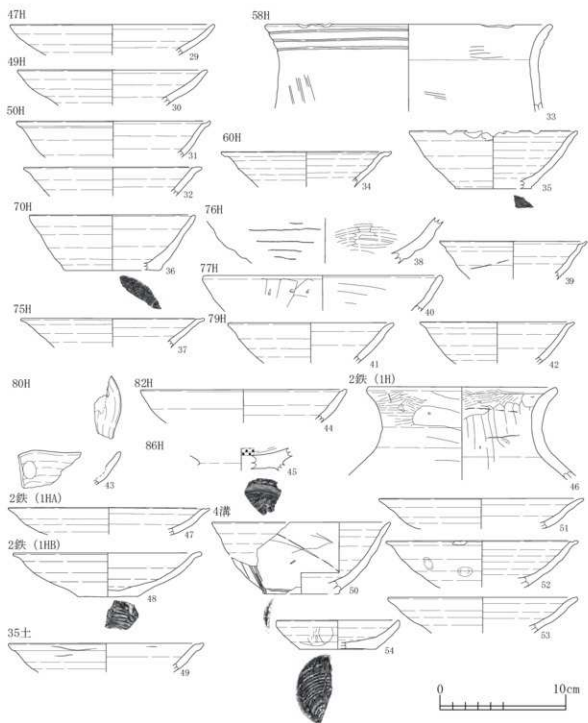
第1節 高屋敷館遺跡出土土器

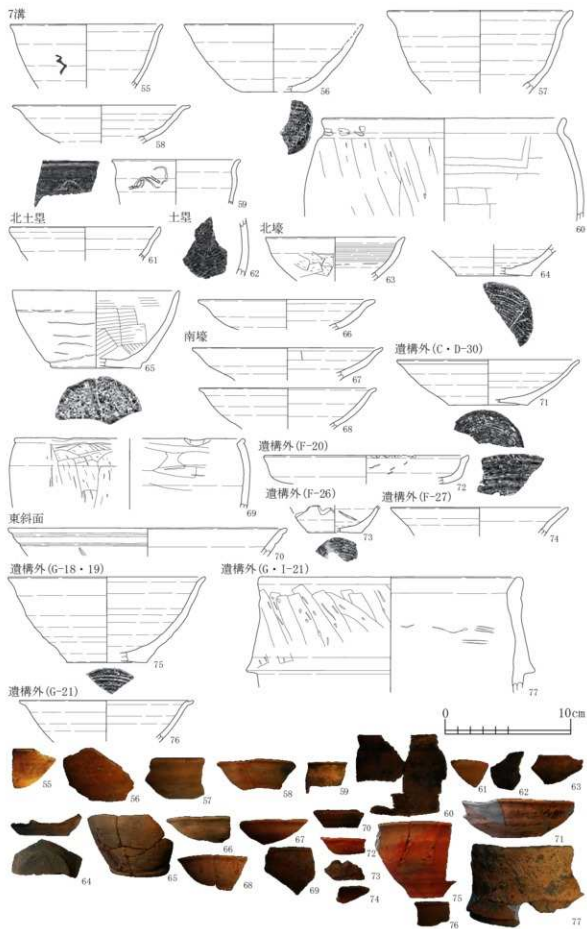
127点図示した。土師器中心の構成ではあるが、須恵器(89)、埴文土器(20・33・62・70)も含ま

れる。土師器のうち、第2号竪穴遺構(第35号住居跡)下土坑出土の23は、外面の頸部に沈線による区

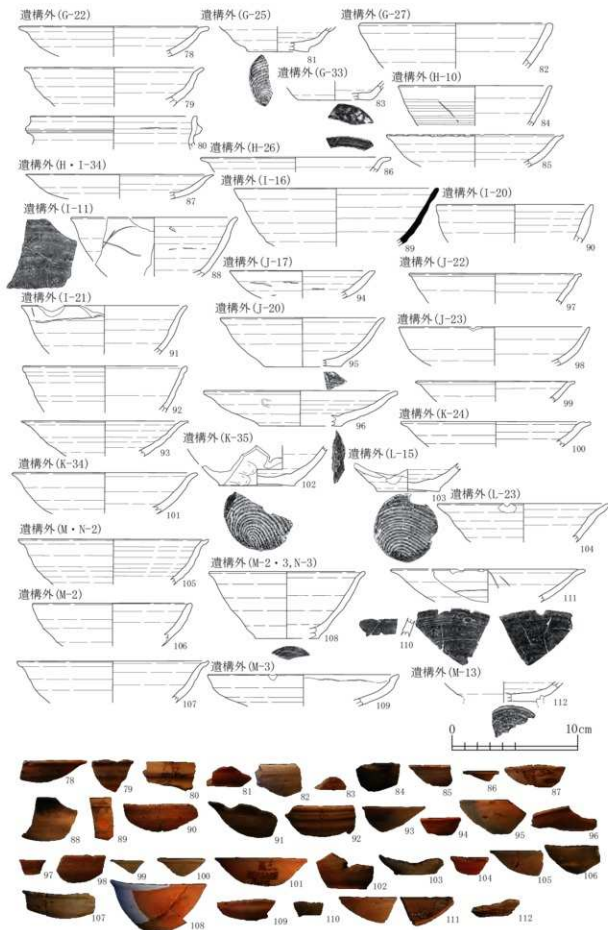


第53図・写真27 追加資料①





第55回・写真29 追加資料③



第56図・写真30 追加資料④

図号	年代	出土状況	場所	形状	寸法	重量	材質	用途	備考
112	12世紀	埋没	土師窯	碗	11.7 × 5.9	5.8	灰	炊飯	589国
113	12世紀	埋没	土師窯	碗	11.7 × 5.9	5.8	灰	炊飯	589国
114	12世紀	埋没	土師窯	碗	7.8 × 3.1	2.2	灰	炊飯	589国
115	12世紀	埋没	土師窯	碗	71.0		灰	炊飯	589国
116	12世紀	埋没	土師窯	碗	113.0		灰	炊飯	589国
117	12世紀	埋没	土師窯	碗	71.0		灰	炊飯	589国

第4表 高屋敷館遺跡出土土器観察表③

画が見られ、内外面ともハケメ調整の9世紀中葉以前の資料で、高屋敷館遺跡周辺の野尻遺跡群を含めた出土資料群の中では最古段階にあたる。また、既刊報告書では非掲載の羽釜は、遺構外出土でロクロ使用の小型のもの(80)と非ロクロの大型のもの(77)が確認されており、大型のものは銚部分を手で摘み延ばすような形で作出しておらず、外面のヘラ削りによる調整で突出させている。

墨書のある資料は、食膳具の第7号溝出土資料(55)のみで、刻書のうち煮炊具は、性格不明工房跡(第11号住居跡)出土の甕体内面に刻まれたもの(9)や外面に刻まれた資料(59・118)がある。食膳具の刻書資料では、細い線描き気味の刻線(19・50・88・110・111)が多く、幅広の資料は遺構外出土の73のみである。その他、外面底部に罫の圧痕が見られる資料(8)、内面見込み部分に爪による刺突が多数見られる資料(122)がある。

食膳具は、口唇の打欠が顕著で、今回図示した資料についても13点含まれる。遺構外出土の85は、キザミ状に打欠を行っており、輪花を意識したような作出である。表採の126は、打欠後に破断面を擦り、小皿状に整形している。

また、食膳具のうち皿形の資料について、口唇端部を特徴的に作出するものが多くみられる。

A1: 口唇端部を浅く窪ませ、内傾させるもの

(16・31・39・76・107)

A2: 口唇端部を浅く窪ませ、平滑気味にさせるもの。外側はそのままのぼし上げるタイプ

A2a (47・85・93・94・100・121)と「て」

の字気味に突出させるA2b(49・52・58・97

・99・120)がある。

A3: A2のタイプに近似するが外面側が面取り気

味に平滑面が作出される(34・105)

B: 凹縁まで至らないものの、平滑面が作出さ

れ、「て」の字気味に突出する(11・78・86)

これらの資料は、既報告の高屋敷館遺跡および隣接の野尻(3)遺跡でも出土例があり、一部須恵器扱いの資料も含まれる。主だったものについて第

58図に図示した。既刊報告書ではこれらの資料について10世紀中葉以降の年代を想定しており、高屋敷館遺跡の内郭内でも切り合い関係で古手の竪穴建物(住居)跡側から出土している。

その他、耳皿が第80号住居跡(43)と遺構外(123)から出土している。

既報告の出土土器は、主に11世紀前葉までを主体とする資料として捉えられ、12世紀初頭とされた年輪年代測定の結果と開きがある。

本章第3節で報告する橋脚の分析結果は、既報告の分析値とほぼ変わらない結果となり、高屋敷館遺跡の東側で11世紀末～12世紀初頭に橋脚が設置されたことと人々の活動は確定となった²⁾。

今回図示した資料の中で、遺構外出土資料の中にかわらけに類似する資料が3点(72・115・119)含まれる(第59図)。それ以外に54に図示した第4号溝跡の第1層出土の小皿は、ロクロかわらけの小型のタイプに類似した資料である。

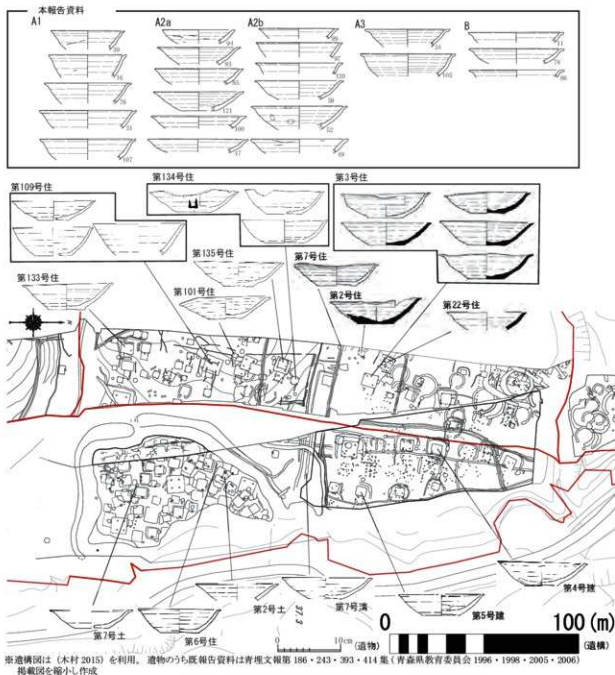
周辺の野尻(4)遺跡の遺構外からも12世紀後葉と判断されるかわらけ(手づくね・ロクロ)、白磁碗等が出土し、平泉期における居館が存在した可能性の指摘があり(羽柴2010)、12世紀代に高屋敷館遺跡及び周辺での土地利用は確定であると言える³⁾。

註

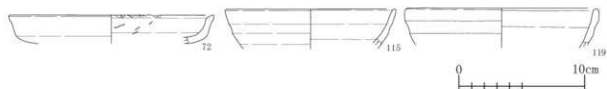
1) 図示した資料のうち青森県埋蔵文化財調査センター所蔵の資料は、筆者が資料調査で遺物全てを写真した。その結果、『野尻(3)遺跡Ⅱ』で須恵器扱いの資料は、他報告書で土師窯とされている資料と同質で、海綿質針を含み、色調は褐色～赤褐色を呈する。大塚版や重んじ版は確認されず、胎土分析も実施されていない。また、口唇端部以外の特徴として見込部分を凹ませる資料が少量含まれている。

2) 塚について、既報告の報告書(青森埋蔵文化財調査センター教育委員会1998)中で東縁の面直しに関する記述・図示(青森埋蔵文化財調査センター15)が見られる。東側の橋脚が検出された地点の本柱が入った土層断面図の図示が見られないが、近接する図15の土層断面図と橋脚の位置関係と比較すると、V字状の境の段階ではなく、前段階の段状の境の時点で横断していたものと推察される。これらのことを総合すると12世紀前半の時点で境が開口していたこととなり、一度埋め戻され、その後再度境が掘削されていたこととなる。その他、既報告の第2号井戸状遺構(青森埋蔵文化財調査センター15)は南縁の落ち跡から検出されているが、実質的には境が埋没ないし上面近くまで埋没した状況での掘削が想定される。

3) 前岡註2) その意味で、いわゆる「防衛性集落」は、確かに10世紀後葉以降に溝や土塁が伴う集落跡ではあるが、遺構が傾斜しない時期での再利用や使用について考慮する必要がある。その取扱については十分注意すべきである。



第58図 口唇部に特徴のある食器具及び既往調査での出土状況



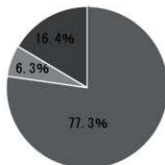
第59図 かわらけ類の資料

第2節 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物について

平成6・7年の青森県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査では、鉄関連遺構2基(第1号・第2号鉄関連遺構)が検出されたほか、多量の鉄関連遺物が出土した(青森県教育委員会1998)。報告書では、鉄関連遺物について大型の炉壁片が一部掲載されているほか、羽口・鉄器が集成されているものの、遺構毎の出土重量以外の情報は不明であった。そこで、出土鉄関連遺物約356kgについて、肉眼観察のほか、強力磁石(TAJIMA製PIP-M)や標準磁石を用いて分類を行い、重量の測定・集計により、遺跡内で行われた鉄生産工程を推定した。

・出土鉄関連遺物の概要

製鉄関連と鍛冶関連遺物が出土している。北～西側の遺構からの出土重量が多みられる。特に遺構内では、第1号鉄関連遺構、9H、土塁、北壕、9溝、遺構外では、調査区中央を南北に縦断するグリッドラインL～0において、15kgを超える顕著な出土重量が認められる(第5表、第63図)。種別毎の比率を出土重量全体でみると、工程の判別が難しい遺物(羽口、鉄塊系遺物、含鉄鉄滓、再結合滓、石、その他)を除いて、製鉄関連遺物(炉壁・流動滓・砂鉄焼結塊・炉内滓)が77.3%、鍛冶関連遺物(板形鍛冶滓・鍛冶滓・鍛造剥片)が6.3%認められ、製鉄関連が大半を占める。遺構毎にみると、製鉄関連遺物は、全体的にも出土量が多い第1号鉄関連遺構、9H、土塁、北壕、9溝から10kg以上出土しており、特に第1号鉄関連遺構からは、製錬炉で一般的に排出される種類の遺物が認められ(第62図・2・3、5～18)、50kgを超える遺物が出土している¹⁾。鍛冶関連遺物は、製鉄関連遺物に比べて量が少ないものの、60H、3竪から1～2kg程度出土している。



第60図 鉄関連遺物出土重量比(種別毎)



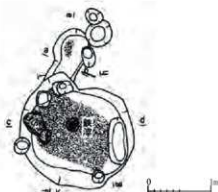
・高屋敷館遺跡の鉄生産

集計の結果、製鉄関連遺物が大半を占める。製鉄関連遺物を主体とし、他の遺構と比べて多くの出土重量が認められた北西側の範囲(第1号鉄関連遺構、9H、土塁、北壕、9溝付近)に製錬炉が存在した可能性が高いと考えられる。特に分析結果から、鋼精錬炉と報告された第1号鉄関連遺構Pi8については、歪ではあるものの、平面形が青森県周辺で検出される製錬炉(歪形炉)に近い形状を示しており、また、製鉄関連遺物を主体として、遺構内で最も多い出土重量が認められたことから、製錬炉であった可能性が高い。土塁や北壕、9溝からも多量の出土が認められた結果については、流れ込み等の要素も考えられるが、第1号鉄関連遺構との位置関係から排滓場として利用されたと想定される。鍛冶関連遺物については、出土重量は少ないが、鍛冶炉が検出された第2号鉄関連遺構のほか、鍛冶関連遺物主体で出土重量が多い60H、3竪の位置関係から、近い範囲での集中がみられる²⁾。このように、本遺跡では、製鉄・鍛冶関連遺物ともに出土重量の多い遺構が北側に多いことから、近接した位置において、集落内自給を基本とした製錬から鍛冶までの一貫した鉄生産が行われていたと考えられる。

註

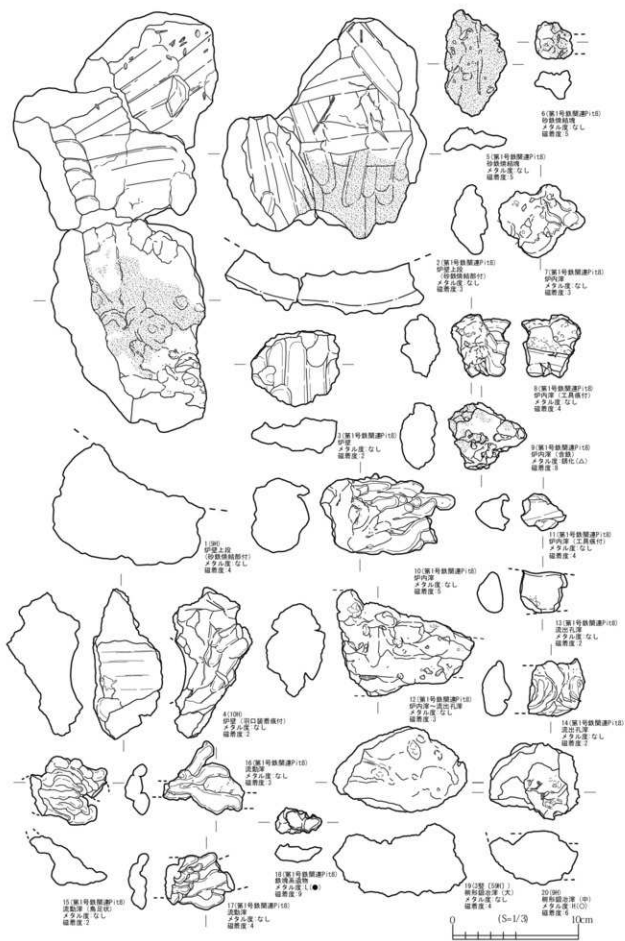
1) 第1号鉄関連遺構と9Hの出土鉄関連遺物については、遺物カードの遺構名のほとんどが両者併記された状態であったが、出土位置から判断し、第1号鉄関連遺構と9Hを区別して記載した。なお、両者ともに鉄関連遺物の傾向が似ているため、一括性は高いと考えられる。

2) 第2号鉄関連遺構については鍛冶炉が検出されている点から、60Hと3竪については出土重量の観点から取り上げた。鍛冶炉については、9溝周辺の鉄関連遺物出土が少ない例(9溝を検出した遺構よりも周辺遺構での出土量が多い場合)もあることから、第2号鉄関連遺構は鍛造剥片のみの出土であるもの、ここで取り上げた。60Hと3竪については出土重量は多いものの、かと思われる部分が認められないことから、排滓場の可能性が高いと考えられる。



第61図 第1号鉄関連遺構内Pi8

青森県埋蔵文化財調査報告書第243集(青森県教育委員会1998)
図193を一部改訂・スケール追加



第62図 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物



青森県埋蔵文化財調査報告書第243集図4 (青森県教育委員会1998) 左一部改変・加筆

第63図 高屋敷館遺跡鉄関連遺物重量分布図

第3節 酸素同位体比年輪年代法による 高屋敷館遺跡東塚橋脚の年代検証

箱崎真隆(国立歴史民俗博物館)・木村淳一(青森市教育委員会)・木村勝彦(福島大学)・佐野雅規(早稲田大学)・對馬あかね(名古屋大学)・李貞(総合地球環境学研究所)・中塚武(総合地球環境学研究所)・名古屋大学

はじめに

青森県青森市浪岡地区(旧浪岡町)に所在する国史跡高屋敷館遺跡は、平安時代に築かれた土塁および壕で囲まれた環壕集落跡である。弥生時代の環壕集落のような大規模な環壕と土塁を伴うことから、本遺跡は発掘当初から全国的注目を集め(青森県教育委員会 1998)、中央政権と蝦夷との関係に絡めた「防衛性集落」論の代表的存在として認知されてきた(三浦 1995, 三浦ほか 2006など)。

本遺跡において、環壕が築かれた年代は、他の遺構群と白頭山-苫小牧テフラ(B-Tmテフラ)との関係から、10世紀第3四半期と推定されてきた(船木 2009など)。なお、B-Tmテフラの年代は近年の研究により西暦946年と確定した(Oppenheimer et al. 2017, Hakozaki et al. 2018)。一方で、その終焉時期には2つの説があり、土器編年や性格の近い他の集落遺跡の盛衰状況から遅くとも11世紀前半とする説(八木 2006, 船木 2009)と、本遺跡の東塚で見つかった橋脚の年輪年代(光谷 1998)などを根拠に12世紀初頭とする説(高山 2006, 三浦 2006など)が示されてきた。

後者の根拠のひとつ、橋脚の年輪年代の報告(光谷 1998)は、年輪数と年代のみが示され、統計評価値(t値)や年輪幅データのグラフが示されていない簡略的報告であった。光谷は日本各地の数多くの古建築や考古遺跡で木材の年輪年代を決定してきた実績を持つことから(奈良国立文化財研究所 1990, 光谷 2007など)、本遺跡橋脚の年代測定結果にも一定の信を置くことができる。しかし、年輪年代法では、得られた結果を確定的なものとするため

に、独立した別の研究機関・組織による検証が必要とされている(Baillie 1995)。そこで筆者らは、光谷が年代測定した2点を含む3点の橋脚を対象に、酸素同位体比年輪年代法(中塚 2015など)を適用し、光谷が求めた年代を検証した。

試料と方法

試料は高屋敷館遺跡の東塚から出土した橋脚(アスナロ材)3点である(表1, 図1)。各試料からノコギリを使用して円盤状の分析試料を分取した(図2)。試料はいずれも樹皮を欠くが、2点には辺材が認められた。試料の横断面を研磨し、0.01mm精度で年輪幅を計測した。得られた年輪幅の時系列データをクロスデーティングして、試料間相互の年代決定を試みたが、それは成功しなかった。

次に、各試料の横断面から厚さ1mmの薄板を切り出し、「板ごとセルロース抽出法(Kagawa et al. 2015)」に従って、セルロースを抽出した。1年輪ごとに酸素同位体比測定用セルロース試料を切り出し、銀箔で梱包して、総合地球環境学研究所の熱分解元素分析計-同位体比質量分析計を用いて酸素同位体比を測定した。得られた酸素同位体比の時系列データを、年代既知のアスナロ酸素同位体比標準年輪曲線(コード名(暫定):A001CH01。青森県東通村猿ヶ森埋没林、青森市石江遺跡群、中道遺跡などのアスナロ材から作成(箱崎ほか 2014, 2015, 2016a, 2016b, 2017など))とクロスデーティングして、暦年代を決定し、先行報告の年代(光谷 1998)と比較した。なお、クロスデーティングは、一般的な年輪考古学の方法に従った(Baillie 1982, English Heritage 1998など)。

結果と考察

年輪年代測定の結果、3点の橋脚の酸素同位体比時系列データは、標準年輪曲線A001CH01と極めて良く一致した(表1, 図3。相関関係の基準3.5を大きく超えるt値を示した)。3点の最外部の年輪年代は、いずれも11世紀末であることが明らかとなった。樹皮が残存しないため、伐採年の特定はできないが、

試料名	年輪数	樹皮	辺材年数	酸素同位体比 分析年輪数	t値(vs アスナロ 標準年輪曲線)	年輪年代(AD)*	
						本報告	光谷(1998)
橋脚1	132	-	11	123	13.32	1091	-
橋脚2	125	-	19	122	14.69	1097	1101
橋脚4	84	-	-	81	11.06	1085	1106

*年代に多少の差が見られるが、光谷は成長僅コアで、筆者らは輪切りの円盤で、それぞれ異なる部位を測定しており、部位ごとの辺材残存量の違いから生じた差であると考えられる。

表1 高屋敷館遺跡東塚出土橋脚年輪年代分析試料の概要



図1 高屋敷館遺跡東壕から出土した4本の橋脚

2点には辺材が残存することから、伐採年は数年～十数年加算して12世紀初頭と見積もることができると考えられる。

この結果は、光谷 (1998) の先行報告と整合的であった。最外部の年輪年代に多少の差が認められたが、これは光谷と筆者らが完全に同一の部位を測定していない (試料採取の都合上できなかった) ことに起因すると考えられる。

なお、今回の分析に用いた標準年輪曲線A001CH01には、西暦775年の炭素14スパイク (Miyake et al. 2012) の再現試料のデータも含まれる。炭素14スパイクは、アメリカ、ロシア、ドイツ、ニュージーランドの年輪年代既知木材で再現されており (Usoskin et al. 2013, Jull et al. 2014, Gütler et al. 2015)、年輪年代法において世界共通の年代マーカーとして認識されている。したがって、今回の検証により、高屋敷館遺跡の橋脚には、世界各地の年輪年代法によって保証された暦年代が付与されたとみなすことができる。

試料の伐採年代は、環境に橋が築かれた年代とみなすことができ、12世紀初頭まで環境が存在したことを間接的に示唆する。ただし、この年代は、あくまで橋が築かれた時代の上限を示すということに留意すべきである。

高屋敷館遺跡の近くに所在する野尻 (4) 遺跡か

らは、12世紀後半の「かわらけ」が検出されており、この地域の土地利用は12世紀代にも継続していた可能性が指摘されている (木村 2015)。今回の分析によって、高屋敷館遺跡の重要な遺物に、確固たる年代が付与されたことは事実であるが、周辺遺跡におけるそのような遺物の検出状況からみて、これを高屋敷館遺跡の集落の終焉、さらには「防衛性集落」の終焉と直線的に結びつけることは早計といえる。

木村 (2015) は、高屋敷館遺跡の周辺において、「防衛性集落」論に絡む大きなスケールの研究と、土器編年や遺跡内の住居変遷など小さなスケールの調査・研究が先行し、周辺の遺跡群を含めた中間的スケールでの総合的な研究がまだ十分ではないことを指摘した。文書史料の乏しい地域における集落の性格変化や利用実態の把握は容易ではない。今後も高屋敷館遺跡とその周辺遺跡において、様々なスケールでの多角的分析・検証を積み重ね、確固たる事実をもとに実態の把握につとめるべきである。

引用文献

- 青森県教育委員会 (1998) 『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集。
- Baillie MGL (1995) A slice through time: dendrochronology and precision dating. Routledge. 176p.
- Baillie MGL. (1982) Tree-ring dating and archaeology. Croom Helm. 274p.

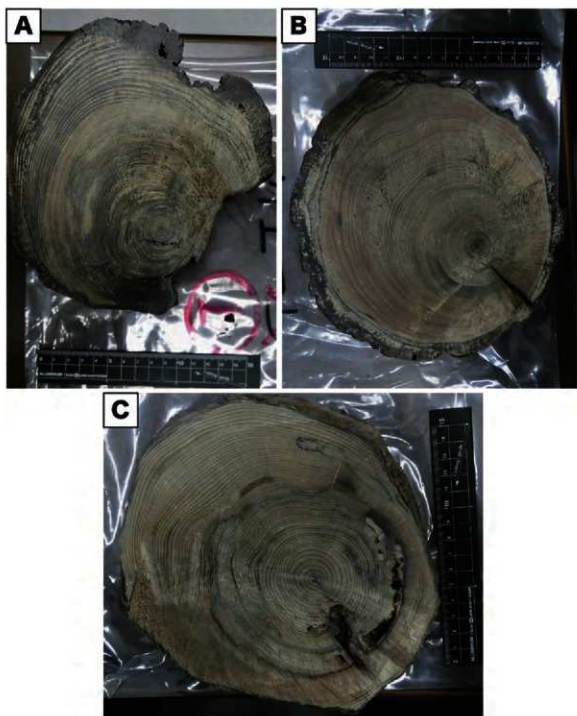


図2 年輪年代分析に用いた円盤試料

A:木柱1, B:木柱2, C:木柱4

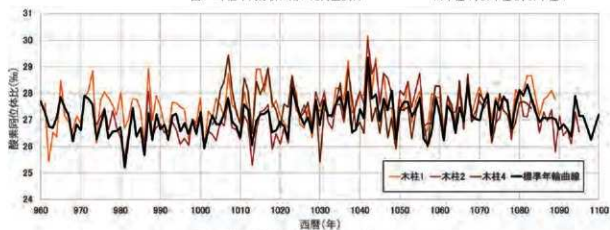


図3 標準年輪曲線と各試料の炭素同位体比時系列データの比較

English Heritage. (1998) Dendrochronology: guidelines on producing and interpreting dendrochronological dates. <http://www.helm.org.uk/upload/pdf/Dendrochronology.pdf>.

船木義勝 (2009) 「堀と土塁」結果表現の諸相-青森市高屋敷館遺跡の基本的考察- 『秋田考古学』 53, 23-48頁。

Guttler D., Adolphi F., Beer J., Bleicher N., Boswijk G. (2015) "Rapid increase in cosmogenic ^{14}C in AD 775 measured in New Zealand kauri trees indicates short-lived increase in ^{14}C production spanning both hemispheres". *Earth Planet. Sci. Lett.* 411: 290-297.

箱崎真隆・木村勝彦・佐野雅規・李貞・對馬あかね・小林謙一・設楽政健・木村淳一・中塚武 (2017) 「中道遺跡・川原館遺跡出土木材の酸素同位体比年輪年代測定」『川原館遺跡・中道遺跡・東早稲田遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第120集、256-259頁。

箱崎真隆・木村勝彦・佐野雅規・對馬あかね・李貞・木村淳一・小林謙一・中塚武 (2016a) 「年輪酸素同位体比にもとづく青森市石江遺跡群の古代～中世の出土材の年輪年代測定」『第31回日本植生学会大会創立30周年記念大会要旨集』、20頁。

箱崎真隆・中村俊夫・木村勝彦・中塚武 (2014) 「北日本産樹木を用いた酸素同位体比標準年輪曲線の構築」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XV, 54-61頁。

箱崎真隆・中村俊夫・大山幹成・木村淳一・佐野雅規・中塚武 (2016b) 「西暦774-775年の ^{14}C イベントと酸素同位体比年輪年代法に基づく青森市新田(1)遺跡アスナロ材の暦年代の検証」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XXVII, 34-39頁。

箱崎真隆・中塚武・佐野雅規・木村勝彦・中村俊夫 (2015) 「北日本産・森砂丘の埋没木を用いた酸素同位体比標準年輪曲線構築」『第30回日本植生学会北海道大会要旨集』、56頁。

Hakozaki M., Miyake F., Nakamura T., Kimura K., Masuda K., Okano M. (2018) "Verification of the annual dating of the 10th century Baitoushan Volcano eruption based on AD 774-775 carbon-14 spike". *Radiocarbon* 60(1): 261-268.

畠山昇 (2006) 「調査報告 高屋敷館遺跡」『北の防弾性集落と激動の時代』同成社、15-24頁。

Jull A.J.T., Panyushkina I.P., Lunde T.E., Kukarskih V.V., Mygale V.S., Clark K.J., Salzer W., Burr G.S., Leavitt S.W. (2014) "Excursions in the ^{14}C record at A.D. 774-775 in tree rings from Russia and America". *Geophysical Research Letters* 41(8): 3004-10.

Komura A., Sano M., Nakatsuka T., Ikeda T., Kubo S. (2015) "An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths". *Chemical Geology*, 393-394: 16-25

木村淳一 (2015) 「青森市高屋敷館遺跡周辺の方形区画について」『金沢大学考古学紀要』 37, 21-30頁。

光谷拓実 (1998) 「年輪年代法による本柱と板状木製品の年輪測定」『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集、356頁。

光谷拓実 (2007) 「米山(2)遺跡出土戸枠の年輪年代」『米山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第433集、205-206頁。

Miyake F., Nasaya K., Masuda K., Nakamura T. (2012) "A signature of cosmic-ray increase in AD 774-775 from tree rings in Japan". *Nature* 486(7402): 240-242.

三浦圭介 (1995) 「北奥・北海道地域における古代防弾性集落の発生と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』 64, 197-222頁。

三浦圭介・小口雅史・斎藤利男 (2006) 「北の防弾性集落と激動の時代」同成社。

中塚武 (2015) 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』 62 (2), 17-30頁。

奈良国立文化財研究所 (1990) 「年輪に歴史を讀むー日本における古年輪学の成立ー」『奈良国立文化財研究所学報』第48冊。

Oppenheimer C., Wacker L., Xu J., Galván J.D., Stoffel M., Gaillardet S., Corona C., Sigl M., Cosmo N.D., Hajdas L., Pan B., Breuer R., Schneider L., Esper J., Fei J., Hammond J.O.S., Büntgen U. (2017) "Multi-proxy dating the "Millennium Eruption" of Changbaishan to late 946 CE". *Quaternary Science Reviews* 158: 164-71.

Ussoskin I.G., Kromer B., Ludlow F., Beer J., Friedrich M.,

Kovaltsov G.A., Solanki S.K., Wacker L. (2013) "The AD775 cosmic event revisited: The Sun is to blame". *Astron. Astrophys.* 552: L3.

八木光則 (2006) 「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防弾性集落と激動の時代』同成社、133-155頁。

報告書抄録

ふりがな	くにせきたかやしきだいでいせきかんきょうせいひほうこくしょん						
書名	国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅲ						
副書名							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第124集						
編著者名	木村淳一、設楽政健、箱崎真隆、木村勝彦、佐野雅規、對馬あかね、李貞、中塚武						
編集機関	青森県教育委員会						
所在地	〒030-0801 青森県青森市新町一丁目3番7号 青森市役所駅前庁舎 TEL. 017-718-1392						
発行年月日	西暦 2019年3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
高屋敷館遺跡	青森県青森市浪岡大字高屋敷館	市町村 02201	道庁番号 330	北緯 40° 44' 12"	東経 140° 35' 03"		史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
高屋敷館遺跡	集落跡	平安			土師器・滑石器・磨文土器 ・土わらび・鉄器遺物		
要約	国史跡高屋敷館遺跡の平成18年度から平成30年度までの環境整備工事について、事業概要・設計・施工内容を所収した。 また、平成28年度に青森県埋蔵文化財調査センターから譲りを受けた、平成6・7年度実施の国道7号浪岡バイパス建設に係る発掘調査の出土資料について、史跡整備に必要な追加情報・分析結果を所収した。						

引用・参考文献

- 青森県 2018 『青森県史通史編Ⅲ』
 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』 青森県文化財調査報告書
 青森県教育委員会 1996 『野尻 (2) 遺跡Ⅱ・野尻 (3) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第188集
 青森県教育委員会 1996 『野尻 (4) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
 青森県教育委員会 1998 『高屋敷館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第303集
 青森県教育委員会 2005 『山元 (1) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第395集
 青森県教育委員会 2005 『林ノ前遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第396集
 青森県教育委員会 2006 『野尻 (3) 遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第414集
 青森県教育委員会 2006 『林ノ前遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
 青森県教育委員会 2008 『山本遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第401集
 青森県教育委員会 2011 『乳井茶臼跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第507集
 青森県教育委員会 2014 『明神沼遺跡・福島城跡Ⅴ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第548集
 青森県教育委員会 2006 『国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第88集
 青森県教育委員会 2014 『石江遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第116集
 青森県教育委員会 2018 『野尻 (4) 遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第123集
- 弘前市教育委員会 2014 『油伝 (1) 遺跡発掘調査報告書』
 おいらせ町教育委員会 2018 『史跡阿光坊古墳群整備報告書』
 外ヶ浜町教育委員会 2012 『山本遺跡』
 浪岡町教育委員会 2001 『平成12年度浪岡町文化財概要Ⅰ』
 浪岡町教育委員会 2005 『平成16年度浪岡町文化財概要Ⅴ』
 浪岡町教育委員会 2005 『史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅲ』
 富山大学人文学部考古学研究室 2002 『津軽経川城跡』 富山大学研究室報告第7冊
 岡本孝之 1998 『外土原岡城集落の性格』 『真鏡』 第16号pp. 2-11
 木村淳一 2015 『青森市高屋敷館遺跡周辺の方形区画について』 『金沢大学考古学紀要』 第37号pp. 21-30
 久世辰男 2001 『集落遺構からみた南関東の弥生社会』
 工藤清香 1997 『考古学研究における境界性-中世・古代への視点から-』 『青森県史研究』 第1号pp. 120-145
 隈根達人 2017 『三重の塚をもつ北奥の古代集落-青森県外ヶ浜町山本遺跡-』 『古代国家と北方世界』 pp. 210-224
 羽保直人 2010 『東日本初期武家政権の考古学的研究-平泉勢力圏の位置づけを中心に-』
 三浦圭介・小川聖史・斉藤利男 2006 『北の防衛性集落と激動の時代』
 八木光則 2011 『北奥の古代末期閉居集落』 『古代中世の蝦夷社会』 pp. 55-90
 Renfrew, C. and Bahn, P. 1991 Archaeology : Theories, Methods and Practice. Thames and Hudson, London.

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財		青森市埋蔵文化財調査報告書	
＊	2 1962 『三内環状遺跡調査報告書』	＊	第 63 集 2002 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	3 1963 『四ツツの遺跡調査報告書』	＊	第 64 集 2002 『赤内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	3 1967 『三浦水遺跡調査報告書』	＊	第 65 集 2003 『野宮山古(中)遺跡発掘調査報告書』
＊	4 1970 『三内丸山遺跡調査報告書』	＊	第 66 集 2003 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	5 1971 『野木遺跡調査報告書』	＊	第 67 集 2003 『原沢(3)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	6 1971 『大湊本郷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 68 集 2003 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	7 1971 『小牧遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 69 集 2003 『赤内(3)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	8 1973 『三内環状遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 70 集 2003 『赤内環状遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
	1979 『原沢遺跡』	＊	第 70 集 2003 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
	1982 『野宮山遺跡調査報告書』	＊	第 71 集 2003 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
	1982 『野宮山遺跡調査報告書Ⅱ』	＊	第 72 集 2004 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
	1982 『福山遺跡調査報告書Ⅲ』	＊	第 73 集 2004 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
	1984 『田代本郷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 74 集 2004 『赤内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
	1987 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅲ』	＊	第 75 集 2004 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
	1988 『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 76 集 2005 『福山(3)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
	青森市埋蔵文化財調査報告書	＊	第 77 集 2005 『赤松遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 16 集 1991 『山沢(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 78 集 2005 『三内丸山(3)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 17 集 1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書Ⅱ』	＊	第 79 集 2005 『赤内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	第 18 集 1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 80 集 2005 『合子山古(中)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 19 集 1993 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅲ』	＊	第 81 集 2005 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	第 20 集 1993 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 82 集 2006 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	第 21 集 1994 『赤内環状遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 83 集 2006 『合子山古(中)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	第 22 集 1994 『赤二内丸山遺跡調査報告書Ⅱ』	＊	第 84 集 2006 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 23 集 1994 『三内丸山(2)・三内丸山遺跡調査報告書Ⅲ』	＊	第 85 集 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	第 24 集 1994 『福山遺跡・福内(2)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 86 集 2006 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 25 集 1995 『赤内環状遺跡部分土調査報告書Ⅱ』	＊	第 87 集 2006 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 26 集 1995 『福家(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 88 集 2006 『福山(高松)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 27 集 1996 『福家(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 89 集 2006 『福山遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 28 集 1996 『三内丸山(3)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 90 集 2007 『月見野(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 29 集 1996 『赤内環状遺跡部分土調査報告書Ⅲ』	＊	第 91 集 2007 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 30 集 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 92 集 2007 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 31 集 1997 『赤内環状遺跡部分土調査報告書Ⅳ』	＊	第 93 集 2007 『合子山古(中)遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 32 集 1997 『福家(1)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 94 集 2007 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 33 集 1997 『野宮山遺跡(3)調査報告書Ⅱ』	＊	第 95 集 2008 『野沢(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 34 集 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 96 集 2008 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 35 集 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 97 集 2008 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 36 集 1998 『福家(1)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 98 集 2008 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 37 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 99 集 2008 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 38 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 100 集 2009 『野宮野(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 39 集 1998 『赤内環状遺跡部分土調査報告書Ⅳ』	＊	第 101 集 2009 『大久保山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 40 集 1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 102 集 2009 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 41 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 103 集 2010 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 42 集 1998 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 104 集 2010 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 43 集 1998 『赤内環状遺跡部分土調査報告書Ⅳ』	＊	第 105 集 2010 『野宮野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 44 集 1999 『野宮野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	＊	第 106 集 2010 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 45 集 1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 107 集 2011 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 46 集 1999 『野宮野・野木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 108 集 2011 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 47 集 1999 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 109 集 2011 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 48 集 2000 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 110 集 2012 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 49 集 2000 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 111 集 2012 『野宮山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 50 集 2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 112 集 2012 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 51 集 2000 『福家(1)・野宮山(2)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 113 集 2012 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 52 集 2000 『大久保山Ⅱ(1)遺跡調査報告書Ⅱ』	＊	第 114 集 2012 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 53 集 2000 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』	＊	第 115 集 2012 『大久保山Ⅱ遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 54 集 2001 『野宮野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 116 集 2014 『江差遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
＊	第 55 集 2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 117 集 2014 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 56 集 2001 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 118 集 2014 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 57 集 2001 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 119 集 2014 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 58 集 2001 『大久保山Ⅱ(1)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	＊	第 120 集 2017 『原沢遺跡・原沢山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
＊	第 59 集 2001 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』	＊	第 121 集 2017 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 60 集 2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 122 集 2018 『赤内環状遺跡調査報告書Ⅳ』
＊	第 61 集 2002 『大久保山Ⅱ(1)遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 123 集 2019 『野沢(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
＊	第 62 集 2002 『福山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	＊	第 124 集 2019 『福山(高松)遺跡発掘調査報告書Ⅳ』

青森市埋蔵文化財調査報告書第124集

国史跡高屋敷館遺跡
環境整備報告書Ⅲ

発行年月日 2019年(平成31年)3月19日

編集 青森市教育委員会
〒030-0801 青森県青森市新町一丁目3番7号
青森市役所駅前庁舎

TEL 017-718-1392

印刷 青森オフセット印刷株式会社
〒030-0802 青森県青森市本町二丁目11番16号
TEL 017-775-1431